

【論 文】

「オデュッセイア」における

オデュッセウスの帰国と復讐（上）

松 本 仁 助

1 エウマイオス物語

I

本論は、統一論的立場から「オデュッセイア」一三歌以下を解釈するものである。一三歌におけるオデュッセウスのイタカ到着直後の状況に関しては、分析論者が以下のように批判している。ヴィラモーヴィツ⁽¹⁾は、アテネが、オデュッセウスに故郷の土地をわからぬようにし、自分で彼にすべての名を挙げるために、霧をたちこめさせた⁽¹⁾と見ており、オデュッセウスが長い間故郷を留守にしていたので、彼には故郷の土地がわからなかった（一三、一八八—一八九）と言うのであれば、アテネの霧は余計なものであり、また実際のところ彼は、長い間留守にしているも、霧のなかでまったく別の形をしていると思える物も見あやまることはなかったであろうと批判している。そし

てヴィラモーヴィッツは、一三、一九二―一九三を削除すべきだとし、アリストパネスの流布本批判を支持して、*Ophra min (tén gáian) autó agnōston teuxeien* (一九〇―一九一) という読み方を選んでいる。他の分析論者たち⁽²⁾も、こまかい点については意見は別れているが、アテネが霧をたちこめさせてオデュッセウスにイタカの土地をわからなくさせている箇所(一九〇―一九三)を改作者の手になったものと見なしている。

だがヴィラモーヴィッツや他の分析論者が言うように、アテネの霧が不自然で余計なものであるのだろうか。イタカの島影を見ながら上陸したのではなく、眠っている間に送還され、ただ一人眠ったまま置いていかれたのであるから、その深い眠りから目覚めたオデュッセウスが、長い間留守にしていたので、故郷を眺めても、すぐには自分が祖国に着いたと思えないのも無理のないことであろう。しかもアテネがオデュッセウスの帰国をすべての者にわからないようにする⁽³⁾ためにあたりに霧をたちこめさせていた故、道や入江や樹木が他の土地のもののように見えたのもけっして不自然なことではないと言えよう。したがってヴィラモーヴィッツのように、アテネ自身が土地を説明するために霧をたちこめさせたと解釈する必要はなく、むしろ彼女はオデュッセウスを秘密裡に帰国させるために、つまり他の者に気づかれないようにするために霧をたちこめさせたと見るべきであり、この霧のためにオデュッセウスには、故郷の土地がよその土地のように見えた⁽⁴⁾と解釈すれば、長期間の留守と霧はけっして相容れないもの、矛盾するものではなく、かえって補いあうものであると言えるのではないか。またこのように見てくれば、オデュッセウスがパイアクス人たちを約束を守らなかつたと非難しながら、彼らが贈物をもち去らなかつたかと心配して調べているのも自然な成り行きと言えるだろう。

このあとアテネが羊飼いの若者に変身してオデュッセウスの前に現われると、オデュッセウスが非常に喜んで、こ

の土地がどこであるのかと尋ね、自分を救ってくれるように頼んでいるが、この場面についても、分析論者のペーテは批判している。その根拠は、手に槍をもった若者が現われたとき、用心深いオデュッセウスが、喜んで不用意に貴重な品と自分を救ってくれと頼んでいるのは不自然であるという点にある。だがこの批判はあたっているのだろうか。勇敢なオデュッセウスが、槍をもっているにすぎない華奢な若者にそれほど用心深く振舞わねばならないとは思われない。むしろこの場合、オデュッセウスは、若者に自分に敵意をもたずに贈物の品と自分を救けるように頼むと同時に、彼の一番気になること、すなわち自分がいま何処にいるのかということを知りたいと言っている故、若者を見た時、彼から土地の名を聞けるとごくすなおに喜んだと見なしてよいのではなからうか。だから若者に変身したアテネが、オデュッセウスに、この土地がイタカなのだと言うと、彼はおおいに喜んだのも当然だろう。だがここで彼は用心深く振舞って真実を述べず、自分がクレタの出身であり、貴重な品とともにフェニキア人に連れだしてもらって、この地においていかれたのだと、自分の素姓をいつわって若者に語った。

しかしここで、逆にこれまですなおに喜んだと見なしうるオデュッセウスが、どうして急に用心深く、知恵をはたらかして自分の素姓を隠したのかという疑問が生じるのもやむをえないだろう。だが一三、一八七―二八六におけるオデュッセウスの心理状態をもう一度見てみるとこの疑問もとけると思う。すなわち眠りから覚めた彼は、長期間の留守とアテネの霧のため、この土地がイタカであるとわからず、よその土地のように思えて途方にくれ、パイアクス人たちを恨んでいたのであるから、若者に出会ったとき、自分に敵意をいだかずに自分を救い、そしてこの土地の名を教えてほしいといい、若者から、この土地がほかならぬ自分の恋いもとめていた故郷イタカであると聞いていたんは非常に喜んだのも無理はないが、相手の若者が何者であるかわからず、またこの土地が、若者の言うように本

当にイタカであるのかを自分の目でたしかめたわけでもないことに気づき、慎重に振舞って自分の本当の素性を若者にあかさず、危険をさけ、だまされないように用心したのも不自然ではないと言える。

ところでオデュッセウスの偽りの話を聞いた若者Ⅱアテネは、美しい女性に変身し、自分が女神アテネであることを彼に知らせて、あらゆる危険において彼をたすけた自分をアテネと見わけることができなかったことを指摘したあと、まずパイアクス人たちの贈物を隠すこと、つぎに自分と一緒に求婚者殺害の計画を練ることを指示した。そして彼が自分の館で多くの苦労を耐えねばならないこと、また誰にも彼がオデュッセウスであり帰国したことを告げずに多くの苦痛と男たちの暴力を耐え忍ばねばならないと言って（一三、二八七―三一〇）いるのである。このアテネの言葉を聞くと、誰でもオデュッセウスが彼女と計画を練ったあと、自分の館の事情を、いやすくなくとも館で苦労を耐えねばならない理由ぐらひは彼女に尋ねると思うだろう。しかしオデュッセウスはこのような質問をせず、アテネのすぐれた変身の術や、トロイアにおける自分にたいする彼女の助力、彼の漂流中に彼女が助けてくれなかったこと、とくに彼が本当にイタカにいるのか疑っていること、彼女が自分をからかっていることか思えないことをアテネに述べている（一三、三一―三二八）のである。このようにオデュッセウスがアテネの示唆（一三、三〇三―三一〇）を無視している点をとらえて分析論者たとえばベ⁽⁷⁾ーテは、オデュッセウスが、アテネの言葉から、すくなくとも彼の館が悲惨な状態にあることを推測できるのであり、一体何が起こっているのかを尋ねねばならなかったのだと批判している。

たしかにさきにもふれたように、オデュッセウスがアテネの言葉を無視している点には、分析論者ならずとも一応疑問が起ころるのもやむをえないだろう。しかし分析論者が言うように一三、三〇三―三一〇が矛盾したものであると

非難しうるだろうか。もう一度この場面をふりかえって見るとオデュッセウスは、若者¹¹アテネから自分がイタカに
 いることを聞いていったんは喜んだが、生来の慎重さから、相手にたいして用心し、自分がたしかにイタカに
 いるかという疑いをいだいた故、偽りの素姓を語ったのもやむをえないことと言えよう。そこでアテネが正体を現わし
 て、一歌、二歌、および四歌末尾との関連から、オデュッセウスに、偽ることをやめようといい、彼の帰国を隠
 し、自分の館で多くの苦勞を耐えねばならないと助言しているのもまた当然のことであろう。だがここであくまで
 用心深いオデュッセウスが、アテネが自分をからかっているとしたか思えないといい、まずイタカを自分の目でたし
 かめたいと願ったのも無理のないところであろう。したがってオデュッセウスが、アテネの助言にたいして直接返答
 せず、助言の内容を確かめずに、自分がイタカにどうかを尋ねているのもけっして不自然ではないと言える
 だろう。⁽⁸⁾

だからアテネも、オデュッセウスの願いにこたえて、彼の思慮深さをほめると同時に、彼の漂流中彼を助けられな
 かった事情を説明した（一三、三三〇—三四三）あと、霧を散らして彼にイタカの土地を見せたのである（一三、三
 四四—三五二）。ここでオデュッセウスが、心から喜び大地に接吻し、アテネが自分を生かし、自分の息子を成人さ
 せてくれるなら昔どおりに供え物をささげるとアテネに言った気持も理解できる。またアテネも、ここでオデュッセ
 ウスと一緒に贈物を洞穴に隠したあと、再度一三、三〇三—三一〇の言葉をうけつぎ、オデュッセウスに、求婚者た
 ちを退治する方法を考えよといい、彼らはペネロペイアに求婚し、三年間も広間において傍若無人な振舞をしている
 が、ペネロペイアは、彼らに結婚の希望をもたせながら、内心では彼の帰国を待っているのだ（一三、三五三—三八
 一）⁽⁹⁾と説明したのも自然の成り行きと思える。そしてこれを聞いたオデュッセウスが、はじめてアテネに、彼女が館

の状況を話してくれなかったらアガムノンと同じような悲惨な運命に会うところであったといい、彼女に求婚者たちへの復讐の方法を考えだし、自分を助けてほしいと頼んだのも当然だろう。またこれにたいしてアテネも、オデュッセウスに、援助を約束し、求婚者たちが彼の館で殺害されることを予言して、彼を汚い老人に変身させ誰にもわからないようにしたあと、忠実な豚飼いの（エウマイオス）のところへいき、そこであらゆることを聞くようにと助言し、彼女自身は、スパルタにいるテレマコスを迎えに行くと言ったのは、五、二二―二七、一三、三〇三―三一〇、三三三―三三八に対応した言葉なのである。だがオデュッセウスは、アテネに、テレマコスを旅立たせて危険な目にあわせたのかと非難すると、彼女は、テレマコスがスパルタで不自由なく暮しており、求婚者たちの海上におけるテレマコス暗殺計画も失敗すると五、二五―二七に対応する言葉を述べた。以上のようにアテネとオデュッセウスは、語りあったあと、別れ、彼は老人の姿をしてエウマイオスのところへ、彼女はスパルタへいったのである（一三、三八二―四四〇）。

このように見てくると、オデュッセウスが若者アテネから自分がすでにイタカにいると聞いて喜んだあと自分の素姓を隠し、しかもアテネが正体を現わして、彼にその後の運命を暗示しているのに、それには返応をしめさず、自分が本当にイタカにいることを証明してほしいと要求し、アテネがその要求をみたと、はじめて彼は、彼女から求婚者殺害の指示を受け、自分の館の状況を彼女から聞き、彼女に援助を頼んだ事情がわかるだろう。つまりオデュッセウスは、まず自分自身でイタカに着いたことを確かめてからでなければ、心から喜ばず、アテネから求婚者殺害計画を聞く気持ちにもなれなかったと言える。要するにオデュッセウスには、祖国の再認がすべてに優先することであり、そのために生来の慎重さからあくまでこの再認を要求したのだと見ることができるといえる。またこの再認の結果彼は

アテネへの信頼をとりもどし、彼女からその後の計画を聞いたと言えよう。そして以上のように理解すれば、さきあげた分析論者たちが批判している箇所も、矛盾しておらず、むしろ自然な筋の展開がなされていると見なすことができるのではなからうか。

II

一四歌から一五歌にまたがるオデュッセウスとエウマイオスの場面の伏線は、すでにI章において見てきたように、一三歌におけるオデュッセウスとアテネの対話、とくにオデュッセウスがアテネに助力をもとめた際に、彼女が彼にあたえた助言のなかに敷かれており、彼がこの助言にしたがった行動をとることによって彼はエウマイオスと会うことになっているのであり、一方テレマコスの場合も、アテネの助言（一五、三六―四二）が伏線となっており、この助言にしたがって、テレマコスはイタカにつくとただ一人船を下りてエウマイオスの小屋へいき、他の者たちを船にのせて町へいかせているのであり、これらの大筋には、何ら不自然な点はないと言える。

しかし、すでにアレクサンドレイアの学者たち以来分析論者たちは、オデュッセウスとエウマイオスの対話のなかに矛盾を見いだし、批判しているのである。たとえば、フォックiiは一四、一七四―一八四を後代の作者すなわちテレマコス物語の作者によって挿入されたと見なしている。そしてフォックは、エウマイオスがテレマコスの旅を嘆き、求婚者たちの陰謀について述べるが、オデュッセウスは、そのことに立ち入っていない。というのもアテネが彼をすでにこの件について安心させているからだと言っている。だがフォックはなぜ改作者がオデュッセウスの無視するテ

レマコスの旅を挿入したのかについては、説明していない。また一五歌におけるエウマイオスの身の上話は、本来は独立の物語であったものが改作者によって挿入されたといわれ、ヴィラモーヴィツツは見なしてあり、その主な理由として、改作者は、これを本来の「オデュッセイア」に挿入することによって、オデュッセウスがこの話を聞いている間に、テレマコスがイタカに着き、父と息子が再会できるように操作していることをあげている。

だが、分析論者たちが批判するように、オデュッセウスとエウマイオスの対話には、矛盾があるのだろうか。さきに述べたように、オデュッセウスもテレマコスもエウマイオスの小屋へいくこと自体には、不自然な点はない。ところでアテネのオデュッセウスへの助言において、「彼（エウマイオス）のそばに坐って、すべてのことを尋ねよ（一三、四一一）」と彼女がオデュッセウスに言っているのを見ると、分析論者ならずとも、オデュッセウスとエウマイオスの対話において、オデュッセウスがエウマイオスにそれほど積極的に質問していないのに疑問をいだくのもやむをえないだろう。しかし一三、四一一とその前後の詩句との関連および一四歌、一五歌における二人の対話を検討すれば、オデュッセウスの消極的な質問の仕方に理解をせしめることができるのではなからうか。まずアテネは、一三、三七五―三八一、三九三―四〇六、四一二―四一五、四二一―四二八において、ペネロペイア、求婚者たち、テレマコスのことをかなり詳しく説明している。したがって「すべてのこと（四一一）」を尋ねるとは、上記のこと以外のすべてのことを意味すると見てよい。すなわちオデュッセウスの使用人、とりわけエウマイオス自身が、老人に変身したオデュッセウスにどのような態度をとるのか、またオデュッセウス自身のことをどのように思っており、さらに求婚者たちをどのように見ているのかを知ることであると解釈してよいだろう。¹³

ところで一四歌において老人に変身したオデュッセウスがエウマイオスを訪れると、彼は、老人を親切にむかえい

れ、自分の主人すなわちオデュッセウスのことを思って心を痛めていることを述べ、求婚者たちの不当な振舞いを非難しながら、老人のこれまでの苦労話を聞かせてほしいといい、彼に食事させた。そこでオデュッセウスは、エウマイオスの主人の消息を知らせることができると言ったが、エウマイオスは、主人に関する消息は信じないのだ。主人はもう亡くなったのに違いないのだ。自分は、主人に会いたいかと、老人に答えている。つまり主人のオデュッセウスを非常に慕ってはいるが、もう彼は亡くなったのだという強い諦めの境地にあることをエウマイオスはしめしているのである。

このことを知った老人¹¹オデュッセウスは、エウマイオスに自分の言うことを信用させるようにして彼から諦めの気持をなくさせようと思い、オデュッセウスは帰国すると誓言し、求婚者たちにオデュッセウスは復讐するだろうと言った。だがエウマイオスは、依然としてオデュッセウスの言葉を信用せず、自分の主人のことをもう言わないでほしい、オデュッセウスの一家は彼の帰国を願ってはいるがと言って、テレマコスのピュロスへの旅立と、求婚者たちの待ち伏せを述べたあと、再度老人の素姓とこれまでの苦労話を聞かせてほしいと言っている。そこで老人は長いつくり話（一四、一九一―三五九）を語っているのである。だがつくり話とはいえ、そこにはかなり事実がちかいことが述べられているのである。すなわち老人がトロイア戦争に加わったと言っているのは、オデュッセウス自身がトロイア戦争に参加したことを、またエジプトで乱暴を働き、部下たちが殺されたと言っているのは、九歌におけるキコン人たちへの攻撃や、一〇歌のライストリュゴン人たちに襲われ、彼の船と乗員を除き、彼らによってすべての船が破壊され、乗員もすべて殺害された事実を、さらにエジプトに七年間とどまり、そこからフェニキア人の船によって運ばれたが、嵐と雷によって船が破壊されてフェニキア人たちは溺死し、彼のみが助かってテスプロトス人の王

ペイドンの息子に助けられたと言っているのは、オデュッセウスの船がトリナキアの島から出航した後、嵐と雷に襲われて部下たちがすべて死に、彼のみが帆柱につかまって流され、九日間漂流してカリュプソに助けられたことと、カリュプソの島から筏で帰国の途についたとき、嵐に襲われスケリアに漂着し、アルキノオスの娘ノウシカに助けられ、衣服をあたえられて彼女の父の館へいくように言われ、その館で彼女の父に歓待された体験をもとにしてつくりだした話と言えるだろう。しかもこのようにつくり話は、オデュッセウスが実際に体験したことよりも、はるかに信じやすいことと思われる。¹⁴ それ故老人がこのようにつくり話をした意図は、自分がオデュッセウス自身であることを相手に隠すと同時に、テスプロトス人の王ペイドンから、オデュッセウスが彼のもとにたちよって歓待され、イタカへ帰る方法をゼウスに尋ねにドドネへいったというつくり話を、したがってオデュッセウスが帰国するのは確かであるということのエウマイオスに信じこませることにあったと見なしうるだろう。だがエウマイオスは、老人の放浪話には感動するが、これまで多くの放浪者に嘘をつかれていたので、オデュッセウスの帰国については信用しない。そこで老人は命に賭けてオデュッセウスの帰国を約束するが、エウマイオスはそれにも応じない。だが、彼は、客人としての老人を手厚くもてなすと同時に、オデュッセウスの帰国を願って神々に祈るのである。つまり老人が、オデュッセウスの帰国を誓言し、つくり話においても彼の帰国を信用させるように述べ、最後には自分の命に賭けて彼の帰国を約束するが、エウマイオスは、あくまでオデュッセウスの帰国を信用しようとしなない。しかもエウマイオスは、一方では、オデュッセウスの帰国をよく願っているのである。ということは、エウマイオスは、放浪者のもたらすオデュッセウスの消息には信頼をおかないし、彼の帰国にも絶望している故に、かえってそれだけ強くオデュッセウスの帰国を願望しているのである。なぜならエウマイオスのほうから、老人に、求婚者たちが無法にもオデュッセウ

スの財産を消尽しており、自分は彼らのために豚を飼っているようなものだといひ、ペネロペイアもラエルテスもテレマコスもオデュッセウスの帰国を願っていると述べ、とくに自分は、このうえもなくやさしくしてくれたオデュッセウスを慕い、両親よりも彼に会いたいという気持を表明しているように、オデュッセウスの一家が求婚者たちから救われるには、どうしても彼の帰国が必要であり、自分自身も現状の苦勞からのがれたいという気持と同時に、彼の手柄を慕い彼に会いたいという強い願望をもっているからである。したがってオデュッセウスが長い間帰国せず、その間にもたらされる消息はいつわりであった体験から、自分自身で確実な証拠を得るまでは、伝聞を信用しないという慎重な態度をとるようになる。同時に、一〇年も消息を絶っていることから彼の帰国を期待できない気持になりながらも、それだけですすまず彼の帰国をつよく願望するようになっていくエウマイオスの心理状態を理解することができる。またエウマイオスは、このように自分の主人に恩義を感じ、彼の手柄を慕い、主人一家のことを心配する人物である故に、老人||オデュッセウスを、彼の主人の消息をもたらずということとは切り離して、客人として手厚くもてなしているのも不自然ではないと言える。それ故オデュッセウスは、エウマイオスを信頼のおける有力な味方と見なそうとする気持になったのも当然だろう。だがオデュッセウスのほうも慎重である。彼はエウマイオスがどれほど客人である自分を大切に扱つかうかをさらに試めそうとして、トロイアにおける体験を語り、エウマイオスが自分に外套を借してくれるかどうか聞いてみた。するとエウマイオスは厚い外套を彼にかけ立派に試しに合格したのである。しかしオデュッセウスは、この「試し」だけではまだ満足しない。翌日の夜、エウマイオスが自分をどのように扱つかうか試そうと思ひ、館の求婚者たちのところへいき、食べ物めぐんでもらおうと思つた。するとエウマイオスは、老人をひきとめ、テレマコスが帰れば衣服をくれて望むところへ送ってくれると言つた。そこでオデュ

ツッセウスは、エウマイオスに、テレマコスの帰国を待てというからには、ラエルテスとアンティクレイアの様子を聞かせてくれと言った。この要求に応じて、ラエルテスの現状とアンティクレイアの死亡を話し、そのアンティクレイアが自分を彼女の娘と一緒に大切に育ててくれたことを語ったので、その話をとらえてオデュッセウスは、エウマイオスに身の上話をするように求めた。この要求に応じてエウマイオスは、自分の詳細な身の上話（一五、四〇三―四八三）をしたのである。そしてこの「試し」において、エウマイオスは、オデュッセウスを館へいかせずにひきとめ、客一人を危険から救おうとする親切をしめたこと、つぎに彼はアンティクレイアが自分を彼女の娘クティメネと一緒に育ててくれたうえ、自分を田舎へやってくれた親切に深い感謝の念をもっていると述べたことで合格し、さらには自分の身の上話によって、老人〓オデュッセウス自身により、忠実なエウマイオスそのものに間違いないことを確認されたのである。

以上のように見てくると、一三歌においては、オデュッセウスは、自分の素姓を隠して、若者〓アテネやアテネ自身という言葉にたいしてさえ慎重に対処し、あくまで自分自身で故郷イタカを再認し、一四歌、一五歌においては、アテネの助言（一三、四一一）にしたがった偽りの身の上話においてさえ、エウマイオスにオデュッセウスの帰国を信じさせようと工夫をこらし、またエウマイオスが客人に親切であるかどうかくりかえし「試し」て、彼が客人に親切な人間で、オデュッセウス一家を心から心配していることを確かめ、さらに彼に身の上話をさせて、彼が豚飼いのエウマイオスであり、忠実であることを自分で確認していると言えるだろう。

したがってさきあげた分析論者の指摘するような矛盾、たとえばエウマイオスがテレマコスの危険を述べている（一四、一七四―一八四）のに、オデュッセウスがこれを無視しているのは不自然であるという非難にも、これまで

見てきたような立場から反論できるのではなからうか。つまりエウマイネスは、訪れてきた老人||オデュッセウスを客人として親切に受け入れ、その苦勞を察していたわりながらも、自分の主人一家の悲惨な状態を述べ、その具体的なことの一つとしてテレマコスの危険を述べていると見ることができるのである。だがこれをふくめ一家の災厄は、主人であるオデュッセウスが不在であり、その消息を絶っていることに原因があると言える。それ故老人||オデュッセスは、ペネロペイア、テレマコス、求婚者たちのことに関してはずでにアテネから聞いていることでもあり、オデュッセウスが帰国するということを、エウマイオスに信用させることに懸命になったと言えよう。と同時に、さきにも述べたように、エウマイオスの忠実さと客人への親切さを試し、それを確認し、彼に自分の味方を見いだしたのである。このように見てくれば、テレマコスの危険に関する分析論者の非難も、不当なこととして退けることができると思う。

注

- (1) U. v. Wilamowitz, *Die Heimkehr des Odysseus*, Berlin, 1927, 6f.
 (2) F. Focke, *Die Odyssee*, Stuttgart-Berlin, 1943, 272 ; A. Kirchhoff, *Die homerische Odyssee*, Hildesheim, New York, 1973, 497 ; R. Merkelbach, *Untersuchungen zur Odyssee*, München, 1969, 58.
 (3) 一一、四五四―四五六のアガメムノンの靈の助言と対応している。なお七、一三九参照。
 (4) 一三、二〇〇―二一六を、分析論者たちは矛盾したものとして批判している。つまり二〇〇―二〇八と二〇九―二一六が矛盾していると言うのである。だがはたしてそうであろうか。二〇〇―二〇八では、オデュッセウスは、失望のあまり、自分の知らないところへおいていかれるよりも、スケリアにとどまっていた他の王のところへ送られ、そこから故郷へ送還されたほうがよかったと思ったのは自然なことであろう。そしてこのあと二〇九―二一五において故郷へ送還するとの

アルキノオスの確約を聞く信じていたオデュッセウスが、裏切られたと思ひ込み、はげしく怒って呪いの言葉を述べたのも当然のことではなからうか。H. Eisenberger, *Studien zur Odyssee*, Wiesbaden, 1973, 216, Anm. 7.

- (5) E. Bethe, *Homer, Dichtung und Sage*, 2. Bd. Berlin, 1929, 61.
- (6) Cf. M. Müller, *Athene als göttliche Helferin in der Odyssee*, Heidelberg, 1966, 89, Anm. 10; Eisenberger, 217, Anm. 9.
- (7) Bethe, 61; G. Finsler, *Homer*, Leipzig, 1968, 351; cf. Focke, 276; Von der Mühl, *Paulys, R. E., Supplementband VII*, 734 f.; Merkelbach, 60.
- (8) Cf. Beßlich, *Schweigen, Verschweigen, Übergehen, Die Darstellung in der Odyssee*, Heidelberg, 1966, 122.
- (9) 拙著「求婚者にたいする神々の怒り」同志社外国文学研究一九・二〇合併号参照。
- (10) Cf. Beßlich, 123.
- (11) Focke, 280; cf. Kirchoff, 501; Von der Mühl, 737, 14ff.; Wilamowitz, *Die Heimkehr*, 14, Anm. 1; Merkelbach, 64.
- (12) Wilamowitz, *Homerische Untersuchungen, philologische Untersuchungen*, 7, Berlin, 1884, 96f.; cf. Kirchoff, 508.
- (13) Cf. H. Erbse, *Beiträge zur Verständnis der Odyssee*, Berlin, New York, 1972, 163f.
- (14) Cf. Eisenberger, 18.

2 オデュッセウスとテレマコスの再会と求婚者への復讐計画

I

アテネの命令（一五、三五―四〇）にしたがって、テレマコスは、イタカに着くとただ一人エウマイオスのところへいき、船と乗員を町へむかわせた。エウマイオスのところで、彼は、ペネロペイアがまだ再婚していないことを聞いたあと、老人||オデュッセウスが席を譲ろうとするのをとどめ、客人にたいする親切さをしめして他の場所に坐り、食事をしたあと、エウマイオスに老人のことを尋ねた。エウマイオスは、老人がクレタ出身で、テスプロトス人の船から逃げて自分のところへきたという要点のみ説明し、老人を嘆願者としてテレマコスに引き渡すと言った。そこでテレマコスは、自分の弱さとペネロペイアの再婚にたいする優柔不断のため、求婚者たちが館で無法な振舞いをしている状況から老人を自分のところへ引きとれない故、(1)衣服、刀、履き物をあたえて、老人の好むところへ送ってやるか、(2)衣服と食物をとどけるから彼をエウマイオスのところにとどめて、世話をしよるように提案した（二六、一一―八九）。

ところでテレマコスが、老人を館へ引きとれない事情については、別の表現ではあるが、すでにエウマイオスによって述べられているところである（一五、三二八―三三四）。しかもテレマコスの提案(1)が実現するまでの間、自分のところにとどまるようにと、すなわちテレマコスの提案(2)の短期間のものをエウマイオスは老人にすすめている

(一五、三三五―三三九)。しかしテレマコス(1)の提案(2)は、衣食をとどける故、ながく老人をエウマイオスのところへとどめるということであるから、エウマイオスの提案にさらに新しく加わったものと言える。そしてこれらの提案から見て、エウマイオスもテレマコスも、老人のことをこのように心配し、とにかく館へいかせず、彼を保護し、客人に親切であろうとしていることは、あきらかであり、彼らの意見は一応聴衆の共感をうるだろう。

だが、多数の無法な求婚者が館にいるという理由で、老人||オデュッセウスがひきとめられ、館へいけないということは、彼の帰国の目的、この場合にはアテネの意図(二三、三〇六―三一〇、三七六、三九四―四〇三)を達成できないということになるのである。折角故郷のイタカに帰り着き、アテネの助力で老人に変身しながら、館へいなければならない、これまでのオデュッセウスの努力は水泡に帰すのである。このことを知っている彼は、テレマコスの提案(1)(2)のいずれかをエウマイオス(1)が選ぶまえに、言葉をはさんだ(一六、九一)。そしてオデュッセウスは、テレマコスの「だがわたし(テレマコス)は、あそこ(館)の求婚者たちのところへ彼(オデュッセウス)をいかせたくない。彼らにはあまりにも傲慢不遜である。彼らが彼を嘲笑し、わたしをひどく悩ませるだろう。強い男でも多数にたいして事をなしとげるのは困難だ。彼らは多数の故に力でもさっているからな(一六、八五―八九)」という言葉をとらえて、「あなたが、館で求婚者たちが無法な行為をなしていると言われているのを聞いて、わたしの心は引き裂かれる(一六、九二―九四)」といい、テレマコスがこのように諦めている理由を尋ねると同時に、自分がオデュッセウスの子か、オデュッセウス自身なら館の広間へ行って求婚者たちすべてを破滅させなければ、すぐさま自分の首を切り落とされてよい。彼らの無法を手をこまねいて眺めているよりも、自分の館で殺害されるほうがましだ(一六、九五―一一一)という意味のことを言ってテレマコスを激励した。

これにたいしてテレマコス²は、自分はオデュッセウスの一人息子で、オデュッセウスは自分を生むとすぐ出征したので、今は近隣の島々から求婚者たちが大勢きて館を荒らしているが、ペネロペイアはこれに結着をつけられないでいる（一六、一一三―一二六）と答えたあと、すぐにエウマイオスにむかって、自分の無事な帰国をペネロペイアにだけ急いで報告しにいくようにいい、自分はエウマイオスの小屋にとどまると述べた（一六、一三〇―一三三）。そこでエウマイオスは、ラエルテスにも告げるべきかどうかをテレマコスに尋ねると、テレマコスは、ペネロペイアに彼女の女中頭をラエルテスのところへ急いでやるように言えばよいと言ったので、エウマイオスは、ただちに町へむかった（一六、一三六―一五五）。こうしてエウマイオスがでていくと、小屋にオデュッセウスとテレマコスしかないのをアテネが見て、父子再会のために介入するのである。

ところでこれまで述べてきた場面について、分析論者たちは改作者の手が加えられていると見なしている。たとえばシャーデヴァルト¹は、本来は、一六、三二に一六、四〇が直接つづいており、一六、二三、二四、二六が挿入されたものであるから、²テレマコスは、館からエウマイオスのところへきて、老人||オデュッセウスに会い、エウマイオスに老人のことを聞いたあと、老人から館のことを尋ねられて、館の状況を話したのであり、その間にエウマイオスは、二人だけを残して自分の仕事をしに外へでた。そしてエウマイオスの留守中に、老人はテレマコスの気持を求婚者たちの殺害方法を考えることに向けさせた。テレマコスは、見知らぬ父の激励により、老人から発する力を感じ、不思議な感動をうけて、老人が神であるのか人間であるのかと自問自答した。そこで老人は、自分の正体すなわちテレマコスの父オデュッセウスであることをあかし、息子と求婚者殺害計画を練るといふ筋であったと見ているのである。もっともシャーデヴァルトは、周知のように改作者によりテレマコス物語が加えられて、現形の「オデュッセイア」

がつくられたという見解をとっている故、今述べたような筋を読みとっているのであるが、現形の筋の展開よりもジャーデヴァルトのいう本来の筋の展開のほうがまさっているのだろうか。⁽³⁾

ところで、ジャーデヴァルトが言うような筋の展開であれば、エウマイオスが、町から田舎へわざわざ自分を訪ねてきたテレマコスに老人の説明をしたあと、テレマコスを見知らぬ老人と二人だけ小舎に残して、テレマコスの提案(1)(2)に対する返答もせず、自分の仕事をしにいくというのは、忠実なエウマイオスには不自然なことではなからうか。一方現形の「オデュッセイア」では、父子ともアテネの指示(一三、四〇四、一五、三八)にしたがって、漂流あるいは旅からイタカに着けば、まずエウマイオスのところへいくことになっているのである。それ故両者がここで出会う伏線はすでに敷かれており、しかもテレマコスは、館からエウマイオスのところへきたのではなく、ピュロスからイタカに着き、ただちにエウマイオスのところへ来ているのである。そして現形の文脈では、テレマコスが、やはりアテネの指示(一五、四〇―四二)にしたがい、急いでエウマイスをペネロペイアのところへいかせ、自分の帰国を彼女に知らせるようにしているのである。それ故、エウマイオスがいなくなり、父子二人になる点については、現形の「オデュッセイア」のほうが、自然であると言えるのではなからうか。

さてこのあとアテネが介入し、オデュッセウスを小屋の外へ呼びだし、「もうお前の息子にすべてを話し、お前たち二人が求婚者たちの破滅を計画し、名高い町へいくべきだ。わたし自身も闘いたい故、お前たちから長くは離れていないだろう(一六、一六八―一七一)」といい、彼を老人の姿から若返らせ、見事な体格にし美しい衣服を着せて、小屋へはいらせた。この立派な姿をしたオデュッセウスを見てテレマコスは、驚き、オデュッセウスを神であるに違いないと言った。オデュッセウスは、自分は神ではなく、自分の不在のため災厄をうけてきたテレマコスの父だ

と云って、テレマコスに接吻し、涙を流した。だがテレマコスは、このことを信じることができず、再度、オデュッセウスを神だといひ、人間なら自分の意志で見苦しい老人から美しい姿に若返ったりはしないと云い張った。そこでオデュッセウスは、自分はオデュッセウスで、ほうぼうを漂流し、災厄をうけて二〇年目に故郷に帰ったのであり、アテネのおかげで姿を変えられるのだと答えると、テレマコスはオデュッセウスに抱きついて涙を流した。そしてテレマコスが、オデュッセウスを誰が連れてきたのかと尋ねると、オデュッセウスは、パイアクス人が多くの贈物と一緒に送ってくれたのであり、この贈物は、洞穴に隠してあると説明し、アテネの指示によって、求婚者殺害の計画を二人で練るためにここへきたのであるから、求婚者たちの数と名前を教え、二人だけで闘えるか、助力を求めるべきかを考えて見ようと言った（一六、一五五―二三九）。

以上アテネの介入から父子の再会、さらにはオデュッセウスが求婚者殺害の相談をテレマコスとするまでの場面を見てきたのであるが、シャーデヴァルトは、一六、一二九―二〇〇、二一六―二二四を改作者の手になるものとし、本来はアテネの介入、とりわけ老人のオデュッセウスを若返らせることはなかったのだと見ているようである。⁽⁵⁾だが、シャーデヴァルトが本来の「オデュッセイア」の詩句と見なしているオデュッセウスの言葉一六、二〇二―二一二を読むと、文脈からして改作者の手になったと見なされている一六、一二九―二〇〇を前提としているとしか思えないのである。事実シャーデヴァルトが本来の「オデュッセイア」と見ている一四歌においても、老人 \parallel オデュッセウスが、エウマイオスに主人の帰国を信じこませることができなかつたように、オデュッセウスが老人の姿をしたままでは、父親のことを記憶していないテレマコスに自分が父親のオデュッセウスであると信用させるのは、どれほど時間をかけても不可能であろう。ところが、自分が若返ったのはアテネの力によるのだ、彼女はすきなように彼を交

える力があり、乞食にしたり、立派な衣服を着た若い男に似た姿にするのだとオデュッセウスが言うと（一六、二〇七―二一〇）、テレマコスには、老人から若返った男をオデュッセウスと信じているのである。だが慎重なテレマコスが、以上のような不思議な現象を述べられて、このように容易に相手を父親と信じるのであろうか。この現象を信じするにはやはりそれだけの理由や体験がテレマコスになければならないだろう。一、二五三―三二四においてメンテス||アテネがテレマコスに忠告をあたえたあと、鳥のように去っていき、テレマコスは、メンテスは神であったのかと驚くと同時に力と勇気を得ている。二歌において、テレマコスが集会で求婚者との論争に破れたあと、二六〇―二六五においてアテネに、父の消息を求めに海を渡るよう自分に命じた神よと呼びかけ、求婚者たちがすべてを妨害すると訴えると、アテネはメントルに変身し、テレマコスに、愚かな求婚者たちの計画や考えなど気にするな（二、二八一）、まもなく彼の企てている航海にでかけられるだろう（二、二八五）と言ってはげましたので、テレマコスは、館に帰り、アテネに言われたとおり旅の食糧を準備し（二、三五三―三五五、三七九―三八〇）、メントル||アテネの用意した船に乗ってピュロスに旅立っている。三歌のピュロスにおいては、テレマコスとメントル||アテネが、ネストルを訪問したあと船にもどって寝ようとする、ネストルがひきとめ自分の館で泊まるように言ったとき、メントルは、テレマコスに泊めてもらうようにすすめ、自分は船と乗員のもとへもどると言うと、尾白鷲に変身して去った。これを見てネストルは、メントルはアテネであるに違いないと言った（三、三二九―三八五）。また一五歌では、アテネが、正体をあらわしたまま、メネラオスの館で寝床に横になりながら眠れずにいるテレマコスに近づき、すぐにイタカに帰るようにと命じ、帰途における注意と帰国後の指示をあたえている（一五、一―四二）。以上のような体験をしている故に、慎重なテレマコスも、トロイアの地でいつもアテネが気にかけていたオデュッセウス（三、

二一九―二二〇）ならば、アテネによって変身されて老人になることができ、老人から若返ったオデュッセウスが、オデュッセウスそのものであると信じていることができたのも当然であろう。⁽⁶⁾

II

こうして父オデュッセウスと息子テレマコスとの両者は、アテネの指示によって再会し、アテネの介入によって再認したのである。ここでオデュッセウスがイタカ到着後になした行動を要約すると、(1)故郷イタカの再認、(2)忠実なエウマイオスの確認、(3)アテネの介入による息子テレマコスとの再認ということになる。しかもこれらは、これまで見えてきたように自然な筋の展開によって起こっていると見える。そしてこの父子の再認の結果、オデュッセウスは、一六、九一―一一一に対応して、息子を最有力な味方と見なし、はじめて求婚者殺害計画を練るためにきたのだという（一六、二三三―二三四）自分の意図をテレマコスにうちあけ、さきに述べたように、求婚者たちの数を知り、二人だけで聞えるか、助力を求めるべきか計画を練ろうと言ったのである（一六、二三五―二三六）が、これもけっして不自然なことではなからう。

ところがテレマコスは、二人で多数の求婚者たちを相手にするのはできない相談だといひ、ドウリキオンからは五人、サメからは二四人、ザキュントスからは二〇人、イタカからは一二人と求婚者の数を述べ、それに若干の従者たちもいるといひ、彼らすべてを館のなかで相手にすれば、悲惨な目に会うだろうから、助力してくれる人をもとめるようにとオデュッセウスにすすめたのも至極当然のことと言ひえる。するとオデュッセウスは、自分ら二人には、ア

テネがゼウスと一緒に助けしてくれるが不十分かと言ったので、テレマコス、二人が助力してくれるのならこのうえないことだと答え（一六、一五五―二六五）、このあと二人で本格的な求婚者殺害計画を練ることになるのも自然なことと言えるだろう。⁽⁷⁾

ところで、ここでオデュッセウスが、彼らの助力者として、アテネだけをあげず、ゼウスを突如としてあげているのは、唐突であるという意見も言えるかも知れない。しかしオデュッセウスは、すでにアテネから、一三、三〇六―三一〇において、自分が求婚者たちの不法な行為を耐え忍ばねばならぬという示唆をうけており、一五、三二六―三三六、一六、八五―八九において、エウマイオスやテレマコスから嘆願者にたいする求婚者たちの無法な行動を予知している故に、彼が嘆願者を守る神ゼウスを味方としてあげているのは、けっしておかしいことではないだろう。⁽⁸⁾

さて二人はこうしていよいよ求婚者殺害計画を本格的に練るのであるが、オデュッセウスは、テレマコスに、夜が明けると館にもどって求婚者たちと交わり、乞食の老人になってエウマイオスと一緒に町についた自分が館で求婚者たちに無礼なあつかいをうけるのを見ても、耐え忍び、おだやかな言葉で彼らに無法をやめるように説得するのだといい、そのあと自分がアテネの指図をうけると、テレマコスにうなづいて合図をするから、広間にある武器を全部倉にしまい、自分ら二人の太刀と槍と楯だけを残しておき、求婚者たちが武器のないのに気づいたら、煙でよごれないように、また彼らが酔っぱらって喧嘩し、武器で争わないようにしまったのだと言うがよいと述べ、さらに自分が帰っていることを誰にも知らせてはならないと口止めし、女中や下男のうち何人が主人にそむいたのかを調べるようにと言った。すると、すでにピュロスとスパルタへの旅において名誉を得るようになってきているテレマコスは、下男の忠誠を調べるために農場をまわることは時間がかかるので得策ではない。それよりも女中たちを調べるようにと助言し

た（一六、二六六―三二〇）。

以上がオデュッセウスとテレマコス of 求婚者殺害計画であるが、これをさらに要約すると、(1)オデュッセウスは、再度老人に変身し、館で求婚者たちに恥ずかしめられるが、テレマコスは我慢する。(2)オデュッセウスの合図がある
と、彼ら二人分の武器をのこして、残り全部を倉庫にしまう。(3)召使の忠誠を調べるのであるが、テレマコスは、時間
の関係から、女中たちだけを調べるようにと助言するという三点になる。ところで(1)はすでにアテネの指示する
(一三、三〇六―三一〇)と
ころであり、(3)の二人だけで求婚者たちを相手に闘うさい、召使たちの誰が自分たちの
手助けとなり、誰が求婚者たちの手助けになるかを前もって調べておくことは必要な措置である。また下男たちのう
ち、農場にいるものでも、たまたま闘い
のとき館にきている可能性も否定できないだろう。だが時間がかかる故、女
中たちを調べるようにというテレマコスの助言は、適切であると言えるのではな
かろうか。なお(2)は、アテネの示唆
一三、三七六、一三、三九四―三九六にしたがって、オデュッセウスが考えだした策略であり、館において求婚者た
ちを殺害するには、広間にある武器を隠すのは必要な措置と言える。

しかし分析論者たち、たとえばヴィラモーヴィッツは、(2)の武器隠しの策略（一六、二八六―二九四）を改作者に
よって挿入されたのであり、一九歌における武器隠し（一九、五一―一三）は、前後の文脈とうまくつながっている
が、一六歌におけるそれは不自然であると見なしている。というのは、オデュッセウスは、一六歌の時点では、求婚
者たちに武器のなくなったのを尋ねられるのを顧慮して、その言訳を考えておくという必要もないうえ、彼が一六
歌で、自分ら二人分の武器を広間に残しておくように言っているのに、実際は、一九、四―五、三一―三三、二二、
二三―二五、一四一において、彼ら二人がすべての武器を倉にしまっており、一六歌の武器隠しと一九歌における実

際の武器隠しとは矛盾しているとヴィラモーヴィッツは見ているからである。だが分析論者が主張するように、一六、二八六―二九四、二九五―二九八が前後の文脈とあっておらず、一九、四―一三、三一―三三および二二、一四一と矛盾しているのだろうか。

まず一六歌の段階において確実に予見しうることは、さきに要約した(1)の老人に変身したオデュッセウスが、館において求婚者たちに無法なあつかいをうけると言うことである。ところが要約(2)の武器隠しでは、テレマコスがオデュッセウスの合図をうけて、武器を取り去ることになっており、その言訳も父から教えられているが、これがどのような状況下でおこなわれるのかは、それほど明確ではない。だがすくなくとも一六、二七四―二七七から、オデュッセウスが、求婚者たちに恥ずかしめられ、足をつかんで引きずられ、物を投げつけられたり、いや外へ投げだされたりすることさえあることを考慮していることがわかるだろう。要するに彼は、求婚者たちによってもっともひどいとりあつかいをうける場合を想定していると言える。しかもその際に、たとえば彼が、広間から投げだされ、館以外のところに居るか、泊まるかしなければならず、館にはテレマコス一人を残すこともあると考えたと思われる。それ故彼は、館を出なければならぬという最悪の場合でも、合図を息子に送りさえすれば、息子は武器を隠すという打ち合わせをしたと見てよいだろう。ところでテレマコスが一人で武器を取り去るのは、求婚者たちが館にいるときかも知れないし、いないときかも知れないだろう。つまり、武器隠しの時期は、オデュッセウスがいないのだから、テレマコスの選択にゆだねられ、求婚者たちや女中たちが館にようがいなかるうが、彼の都合のよいときに、彼らに気づかれないよう武器を取り去るといふ合意がなされたと推測してよいだろう。したがって、「求婚者たちが武器のないのに気づいて尋ねたら、うまく話して彼らをだますように(一六、二八六―二八七)」とオデュッセウスがいい、

「煙でよごれないようにかたづけただ（一六、二八八）」ではじまる言訳をテレマコスに教えているのも、求婚者たちが知らない間に、テレマコスによって武器が隠されることを前提として見れば、不自然ではなくなるだろう。¹⁰⁾

しかし父子二人の武器は広間に残しておくように（一六、二九五―二九六）というオデュッセウスの指示は、どう解釈すればよいのだろうか。この点に関しては、この詩句につづく「われわれ（父子）が、彼ら（求婚者たち）を攻撃するさい、（残された）武器を手にとることができるように（一六、二九七）」という句と、アテネとゼウスが、求婚者たちをまどわして（彼らを自分らがうまく攻撃できるようにして）くれるだろう（一六、二九八）¹¹⁾という言葉をあわせ考えると、オデュッセウスが、最悪の条件においては、残した武器で、ゼウスとアテネの助けを得て、求婚者たちを攻撃しようという計画をたてたと見ることができよう。

要するに、一六、二六七―二九八においては、オデュッセウスは、想像しうる最悪の条件において求婚者たちと闘わねばならない場合の打ち合わせをテレマコスとなすと同時に、息子に立派で勇敢であるようにとうながしていると見えよう。また息子のほうも、召使の忠誠を試すというオデュッセウスの提案³⁾にたいして、もはや自分は「心の弱さ、軽卒さ（一六、三一〇）」をもってはいないと行って、女中たちの忠実さのみを試すようにと提言しているのである。

ところが現実には武器隠しがなされた（一九、四―一三、三一、三三）ときは、それまでの成り行きから、父子二人はよりよい条件にめぐまれ、彼らだけが広間に残れることになり、彼ら二人で広間から武器を取り去ることができるようになったのである。しかし求婚者たちがあとで武器がないのに気づいたときの言訳はやはり必要であり、オデュ

ツセウスが、そのときのことを考え、前以って教えてある言訳（一六、二八八―二九四）をなすようにテレマコスに命じている（一九、四―一三）のも当然の措置であろう。さて彼らは、この場合でもアテネの助力を得（一九、三三―三四）、二人で武器を取り去ったのであるが、自分らの武器を残さず、すべての武器を倉にしまいこんだのである。

この点に関しても、分析論者が批判しているのはさきに紹介したとおりである。だが彼らの行動が、それほど矛盾しているのだろうか。一七歌、一八歌における求婚者たちの無法な振舞は、オデュッセウスが一六歌において推測しているとおりの、いやそれ以上のひどさであると言えよう。こういうような状態において、父子二人だけの武器を残しておけば、求婚者たちが武器のないのに気づいたとき、オデュッセウスの教えた言訳は通用しないばかりか、かえって求婚者たちの疑惑をまねくと思われる。それ故むしろすべての武器を取り去っておくほうが、さきの言訳を求婚者たちは信じるだろう。この点オデュッセウスは、テレマコスに命令の変更理由を説明していないが、一七歌、一八歌において、求婚者たちの無法を体験した彼らは、すべての武器を隠すほうがよいということを手で理解しあつていたと見ることができし、またそのように見てもけっして不自然ではないだろう。⁽¹²⁾

また聴衆にも、二人分の武器を残しておいて父子の計画が求婚者たちにさとられずにすむかという不安を消し去る一方、武器なしで父子は求婚者たちとどのように闘うのかという興味と心配を抱いて筋の展開を見まもらせるということになるだろう。したがって分析論者が矛盾していると言つて非難している場面も、けっして不自然なものではなく、むしろ今後の筋の展開に聴衆の関心をひきつけるという点を作者は配慮したと見てよいだろう。

さてアテネの介入によって、オデュッセウスとテレマコスが、父子の再認をし、求婚者の殺害計画を練っている間に、テレマコスの船と乗員たちは港に着いた。ペネロペイアは船からの使者とエウマイオスから、テレマコスが無事

に帰国し、田舎にいることを聞いた。エウマイオスのほうはペネロペイアに直接テレマコスのことを話すとすぐ帰途に着いた（一六、三三一―三四二）。一方、テレマコス待ち伏せし殺害しようとしていた求婚者たちの驚きは大きかった。そしてアンティノオスは、テレマコスを危険な敵と感じ、彼を除くために、あらためて彼を殺害する計画をたてようとした。だがこの計画には、求婚者たちのすべてが賛成したわけではなかった。またペネロペイアも、求婚者たちの前にあらわれ、アンティノオスの非道な計画をはげしく非難したが、エウリュマコスにいなされて自分の寢床で涙を流して悲しんだ（一六、三四二―四五一）。

一方田舎のエウマイオスの小屋では、アテネが、オデュッセウスの正体をエウマイオスに知られないように、彼の姿をまた老人の姿にもどしていた。エウマイオスが帰ってくると、テレマコスは、彼から町や求婚者たちの様子、彼らの見張りの船の様子を聞くと、老人の父親に目くばせをしてほえんだ。そのあと彼らは食事をして眠った（一六、四五二―四八一）。

III

翌朝テレマコスは、館へむかい、エウマイオスには、老人||オデュッセウスをあとから連れてくるように言った（二七、一五）。これは、前日テレマコスが、老人を館へいかせないようにひきとめた（一六、六九―八九）のは、まったく逆のことである。いやエウマイオス自身が前々日の晩に老人に館へいかなないように言っている（一五、三二六―三三九）のである。このような反対のことがテレマコスによってエウマイオスに言われた理由が、父子の再

認と求婚者殺害計画にあることは、聴衆にはよくわかっている。しかしエウマイオスには、彼の留守中に再認と殺害計画がなされたので、全然わからないままである。しかもこのことについての説明が、テレマコスによってなされないものである。そこでエウマイオスが抵抗するか、疑惑を表明するか、すくなくとも質問するだろうと思われる。いやエウマイオスは、テレマコスと議論しようと思えば、できるのである。だが、テレマコスの立場からすれば、「オデュッセウスが家にいることを誰にも話してはならない。ラエルテスにも豚飼い（エウマイオス）にも家にいるどの召使いにも、ペネロペイアにさえも知らせるな（一六、三〇一—三〇三）」と父に言われているので、ただ前日と逆のことをいい、その理由として、「わたし自身が苦悩を背負っているのだから、すべての人間を助けることはできない。もし客人がそれに腹をたてたら、彼にとってはそれだけ苦しみが大きくなる。本当のことを言うのがわたしの主義なのだ（一七、一一一—一一五）」ということを述べている。しかしこのテレマコスにはふさわしくない冷たい言葉は、前日の彼の言葉とは大きくずれており、エウマイオスを納得させることができないのはあきらかであろう。いやどのように言っても、彼の留守中に起こった事実を知らせる以外には、エウマイオスは、テレマコスの老人にたいする態度の変化に疑念をもちつづけるだろう。このことはテレマコスにも十分わかっている。だがテレマコスは、事実を述べることはできない。そこで彼は、老人を町へ連れていくことを、エウマイオスに「命令している（一七、九）」のである。つまりテレマコスは、前日の態度とは異なる、いやむしろ彼の気持に反する理由を一応述べるのであるが、エウマイオスがその説明に納得しないことはわかっているので、老人を町に連れていかせるために、忠実なエウマイオスに心を鬼にして、そのことを前もって命令としてあたえたと言えるだろう。

忠実で善良なエウマイオスは、テレマコスの命令ならば、不審の念をいだきながらも、それを実行するだろうが、

老人にたいして、彼が、主人の冷淡な態度への変化をすまないと思うのは当然だろう。そこで賢明なオデュッセウスは、テレマコスの言葉（一七、一二―一五）に応じて、自分が田舎にとどまることを望んでいないのだ。自分には田舎にいるより町で食べ物乞うほうがよいのだ。農場で主人の命令どおりにできるほど自分は若くはない（一七、一七―二一）と述べて、テレマコスをかばう一方、エウマイオスに、自分のほうから町へいくことを願っている事情を説明した。だがどんなに言い訳しても真実でない以上、エウマイオスの心に不審の念が残るの仕方がないことだろう。事実エウマイオスは、あとで老人に、自分は彼に農場の世話をしてもらいたいのだが、主人の命令だからやむをえず連れていくのだと言っている（一七、一八五―一八九）のである。だがオデュッセウスは、エウマイオスにこの点に関する応答ができず、ただ案内を頼み、杖にする棒をほしいと言うだけであった（一七、一九三―一九六）¹³。

こうして彼らは、前後して町へむかった。テレマコスが、求婚者殺害のことを思いながら館に着くと、最初に彼の乳母エウリュクレイアが彼に気づき、他の女中たち、さらには母親ペネロペイアも部屋からできて彼に接吻した。そして母親は、彼の旅立を非難したが、旅での見聞を話してほしいと言った。しかし父親と再会し求婚者殺害計画を練ったあとであるので、テレマコスは、今は自分の心を平静にしておいてほしいと頼み、ペイライオスのところに自分の客をあづけてあるから彼を迎えに集会所へいくといい、広間のほうへいった。そこには求婚者たちが大勢おり、テレマコスを見て驚いたが、テレマコスは彼らを避け、メントル、アンティポス、ハリテルセスのいる所へ行って坐った。彼らが旅のことを尋ねているとき、ペイライオスがテオクリュメノスを連れて集会所へいくのを、テレマコスは見たので、ペイライオスのところへいった。テレマコスは、ペイライオスがメネラオスの贈物を取りにこさせるようにと言うのを断わり、テオクリュメノスを連れ帰り、女中たちに身のまわりの世話と食事の用意をさせた。彼らが

食事をおえると、テレマコス¹⁴は、ペネロペイアの求めに応じて、メネラオスがプロテウスから聞いたこと、すなわちオデュッセウスがカリュプソの島におり、帰国のすべもないことを話した。だがメラムプスの子孫アムピアラオスの子テオクリュメノスは、予言者で、オデュッセウスはすでに帰国していると言った。しかしペネロペイアは、その予言にたちいらず、丁寧に礼を述べただけであった。その間求婚者たちは競技をたのしみ、食事をとった（一七、二六一—二八二）。

一方、老人のオデュッセウスとエウマイオスは、町へむかったが、彼らは、山羊飼いのメランティオスに会った。彼は二人を嘲笑したが、オデュッセウスは耐え忍んだので、争いが起こらずにすんだ。しかしメランティオスが、オデュッセウスが死んだと信じており、テレマコスも求婚者たちによって殺害されることを望んでいるのがわかった。やがて二人が、館にくると、オデュッセウスは、自分の館の様子を客観的に述べ、エウマイオスとの話し合いの結果、オデュッセウスがあとで館の中へはいることになったが、そのとき彼の愛犬アルゴスが馬や牛の糞のなかに瀕死の状態¹⁵で横たわっているのをオデュッセウスが見つけ、ひそかに涙を流した。アルゴスは、変身している自分の主人オデュッセウスに気づき、尾を振ったが、それ以上の力もなく死んでしまった。こうしてオデュッセウスと愛犬アルゴスの再認がなされたのであるが、この悲しい再会は、召使いたちの亡くなった主人への不誠実と館の危険な状態を象徴しており、またエウマイオスの説明もこのことを裏づけている（一七、二〇〇—二二七）。

このようにオデュッセウスが、安全なエウマイオスの小屋から出ると、途中不遜なメランティオスに会い、館の愛犬アルゴスの死に遭遇することは、館のなかでこれからうける彼の苦難を聴衆に推測させるのである¹⁵。一方エウマイオスはさきに館のなかにはいったが、テレマコスは、彼に合図して呼びよせ、つづいてはいつてきた老人¹⁶オデュッ

セウスにパンと肉をあたえさせた。これにたいして、オデュッセウスは、テレマコスが幸せであり、その願望が成就されるようにと、意味深長な感謝の言葉を述べた。そしてオデュッセウスが食事しおわると、アテネは、彼に求婚者たちのところをまわって物乞いするようにすすめた。求婚者たちは、あわれんで彼に食べ物にあたえたが、老人が何者であるのか尋ねた。この時メラントイオスが、エウマイオスが老人を連れてきたのだと言った。そこでアンティノオスが、エウマイオスを責めたので、エウマイオスも、アンティノオスの振舞いを非難した。しかしテレマコスが、嚇的な態度で答えた。このあと老人が、アンティノオスのところへいき、施し物をもとめながら、金持であった彼が、乞食になった自分の生涯を語った。これにたいしてアンティノオスは、施しを拒否し、自分の食卓から離れるように言った。するとオデュッセウスは、アンティノオスに皮肉を言ったので、アンティノオスは、怒ってオデュッセウスに足台を投げた。だがオデュッセウスは岩のようにしっかりと立ったままで、求婚者たちにたいする復讐のことを考えた（一七、三二八―四六五）。

以上がオデュッセウスが館に入ってからこの事件の推移である。だがこの場面についても、分析論者たちが、改作者の手が加わっていると見ているのである。まず一七、三六〇―三六四において、アテネがオデュッセウスに求婚者たちのところをまわって物乞いし、寛容な者と無法な者を知るようにとすすめているが、彼らのうちの誰も破滅から救ってやろうとは思っていなかったと語っている点が、すでに一七、三四五―三四七において、テレマコスが、エウマイオスに、パンと肉を乞食の老人にオデュッセウのところへもって行ってやり、求婚者各人に物乞いするように言え、という、食物に困っている者には、恥は無用なのだという意見を述べている故に、おそらく三六〇―三六四を、三

四五―三四七と重複する余計なものであると分析論者たちは⁽¹⁶⁾批判し、改作者がそれを挿入したと見なしているのである。

ところで挿入されたと見なされている三六〇―三六四にたいして、分析論の立場をとるフォック⁽¹⁷⁾が、たしかにこのアテネの介入は余計なものであるが、これは、オデュッセウスがペミオスの歌がおわると、求婚者たちの態度をためすために、物乞いをはじめるとききたと見なしていることを意味しているのだと主張し、アテネの介入は挿入されたものではないとしている。この点統一論者のアイヒホルン⁽¹⁸⁾もフォックの説を支持している。だがフォックの解釈によつて、アテネの介入が不自然ではないと納得しうるだろうか。要するにファックの主張は、アテネの介入はオデュッセウスの物乞いの時期を意味しているということにあるが、アテネの意図がそれだけにあるのでないことは明らかである。というのは、求婚者たちに物乞いするのは、彼らのうちの寛容な者と無法な者とをオデュッセウスが見わけ(一七、三六二―三六三)ためであり、このことを意図してアテネが介入したと言える。ところがアテネは、求婚者たちすべてを破滅させるつもりなので(一七、三六四)ある。そうすればここで当然疑問が起ってくるだろう。それはまず(1)アテネは、求婚者たちすべてを破滅させるつもりであるのに、どうして彼らのうちの善人と悪人とをオデュッセウスに見わけさせようとしたのであるかということであり、つぎに(2)彼らすべてを破滅させるのに、テレマコスもアテネもオデュッセウスに物乞いさせる必要はないかということである。

ところでアテネ、オデュッセウス、テレマコスの三人についての行動の原則は、求婚者たちをすべて館のなかで殺害するということ(一四、三七六、三九二―三九四⁽¹⁹⁾、一六、二三三―二三四⁽²⁰⁾)である。⁽²¹⁾またそのためにアテネとオデュッセウスにとっては、オデュッセウスが、館において人々から無法なあつかいや苦痛をうけても耐え忍び、誰にも

自分が帰国したことを知らせてはならない（一三、三〇六―三一〇）ということ、さらにオデュッセウスとテレマコスにとっては、オデュッセウスが乞食の老人の姿で館において恥ずかしめられても、テレマコスは耐え忍び、誰にもオデュッセウスの帰国を知らせないということ（一六、二七二―二七七、三〇〇―三〇三）がそれぞれの行動の原則である。要するに、オデュッセウスたちは、求婚者たちすべてを館で殺害するために、彼の帰国を秘密にし、彼らける苦痛をオデュッセウス自身もテレマコスも耐え忍ぶということになっているのである。では、テレマコスは、いま述べた原則にしたがって、自分のほうから、エウマイオスを通じてオデュッセウスに指図し、物乞いをしてまわらせ、彼に苦痛をうけさせ、それをオデュッセウスもテレマコス自身も耐えるというふうに、積極的な行動にでたのだろうか。そしてオデュッセウスが物乞いをしてまわるのは容易でないと思つたアテネが元気づけたのであろうか⁽²²⁾。

一六、二四一―三二〇における父子の求婚者殺害計画の場面を見れば、テレマコスは、たしかに賢明であり、父親の助けになるだろうが、自分で計画をたてて事をなすほどの積極性はまだ認められない。ではなぜテレマコスは、物乞いをするように、オデュッセウスにつたえたのだろうか。オデュッセウスとテレマコスが父子であることを再認し合った直後、求婚者を殺害するという原則にしたがって、オデュッセウスは、テレマコスに、まず求婚者たちの数と彼らがどのような男たちであるかを教えるように頼んでいる（一六、二三五―二三六）。これに対応してテレマコスは、老人のオデュッセウスに、食物をあたえ、物乞いをして数と性格を知る機会を選ばせたと見ることはできないだろうか。またアテネもこの機会に、テレマコスよりも、物乞いの目的を詳しく説明し、無法な求婚者と寛容な求婚者を知るようにすすめているが、それもやはり求婚者殺害計画のために、すなわち彼らを館で殺害する戦術のために、寛容な者と無法な者を見わけておくべきだと言っていると解することができるのではないか。というのも以上

のように見れば、一七歌のテレマコスとアテネによるオデュッセウスへの物乞いの提案も一三歌、一六歌におけるアテネとオデュッセウス、オデュッセウスとテレマコスの求婚者殺害計画つまり求婚者にたいする復讐に対応した当然なものと言えるだろう。またアテネが、物乞いによる求婚者の善人と悪人の区別をするようにすすめながら、すべての者を破滅させてやろうと思っていたのも、ペネロペイアに不当な求婚をしているすべての求婚者の殺害が原則であるからであり、求婚者における善人と悪人の区別をするのは、さきに述べたように求婚者をすべて殺害するための戦術と見れば、アテネの物乞いの提案理由と彼女の決意とは矛盾してはいないと主張しうると思われる。さらにアテネもテレマコスも、オデュッセウスに物乞いをさせることによって、乞食の老人がオデュッセウスであることを隠すことができることも考慮していると思われる。しかも両者ともが、おなじ内容の提案をしているのは、さきの原則を両者がよく必得ていることではなからうか。

IV

さてテレマコスとアテネのすすめで、オデュッセウスは、物乞いをはじめだした。だがこれにつづく場面一七、三六七―四一〇がシャーデヴァルトによって挿入と見なされている。たしかに三六六に四一一以下を直接接続させてもおかしくはないだろう。しかしこの三六七―四一〇が挿入されていることによって、筋が不自然な展開になっているのだろうか。

まず三六七―三六九において、求婚者たちが、見知らぬ乞食の老人の出現に驚いているのは、当然のことであり、

また、すでに二二二―二五七におけるオデュッセウスおよびエウマイオスとメランティオスの場面を知っている聴衆は、メランティオスが、その乞食の老人を連れてきたのはエウマイオスだと、求婚者たちに告げているのを、卑劣なメランティオスにふさわしい行動と思うだろう。そしてこれを聞いた求婚者たちのうちのもっとも無法な者でイタカの王位を狙うアンティノオス（一、三八三―三八七、四、六六〇―六七二、一六、三六三―三九二、二二、四九―五四）が、求婚者たちが館の食物を食べているのを非難しているエウマイオス自身が、乞食の老人をつれてきたと言ってエウマイオスを難詰し、館の財産を自分が守ってやっているかのような口を利いたので、エウマイオスは、誰もこのんで自分を食いつぶすことになる乞食を招きはしない。アンティノオスが、求婚者たちのうちでいつも一番ひどくオデュッセウスの召使を苦しめると非難したのも自然な成り行きと見てよいだろう。またこのとき真実を知っており、両者の口論が激化するのを恐れたテレマコスが、双方の間にはいり、エウマイオスには、アンティノオスが人をひどくののしり、ほかの人をもけしかけるから、彼に多くの返答をしないようにと命じ、アンティノオスには、自分の館の財産を守ってやっているというアンティノオスの態度を皮肉って、自分のためを思って乞食を追い払えと言ってくれているのだと言ったうえで、自分にはそんなことはできないから、乞食に食べ物をあたえてやってほしいが、アンティノオスはそうは思わず、自分がたくさん食べたいのだと嫌味を言ったのも不自然ではないと思われる。そしてこの嫌味に無法なアンティノオスが、求婚者たちが自分のように振舞えば乞食はよりつかないだろうと言って、足台をとって投げるぞといわんばかりの威嚇的な態度をとったのも当然だろう。

このように見てくれば、一七、二二二―二五七との関連で、メランティオスによって、エウマイオスが乞食を連れてきたことが求婚者たちに告げられた結果、まずアンティノオスとエウマイオス、つぎにアンティノオスとテレマコ

スの口論が起こっている事情(一七、三六七―四一〇)がわかり、自然な筋の展開がなされていると言えるだろう。しかもアンティノオスとエウマイオスやテレマコスが口論していたから、その間にオデュッセウスは、他のすべての求婚者たちから食べ物をあたえられ、最後にアンティノオスのところへいったのも理解できるだろう。しかもオデュッセウスは、他の求婚者たちからは、黙って食べ物をもらっているのに、アンティノオスには、王のように見える人だから多くの食べ物をあたえてくれるはずだといいながら、自分の生涯を語って、力を頼んで乱暴をすれば、神の意志により豊かな者も貧窮のどん底におちるのだと述べているのは、オデュッセウスが、黙って物乞いをしている間に、アンティノオスとエウマイオスやテレマコスとの口論を聞き、アンティノオスが一番無法者で悪者であることを知り、まず彼を皮肉り(一七、四一五―四一八)、つぎに彼に警告を發した(一七、四一八―四四四)と見ることができるのである。つまり三六七―四一〇を前提とすることによって、オデュッセウスが、アンティノオスにのみ、皮肉と警告の言葉(一七、四一五―四四四)を述べているのがよりよく理解できる。もし一七、三六七―四一〇が削除されるならば、オデュッセウスが、アンティノオスにのみ皮肉と警告を發している深い意味がわからないだろう。そしてこの場合には、ただアンティノオスが一番無法者に見えるというだけで、オデュッセウスは、アンティノオスに最後に話しかけ、彼をおこらせないようにへつらいの言葉を述べ(四一五―四一八)、そのあと自分の生涯を語って運命の変化の激しさを(四一五―四四四)述べ、哀れな自分に食べ物をあたえてくれるようにという深みのない平板な意味にしかとれないだろう。

ところでオデュッセウスの言葉(四一五―四四四)にたいして、アンティノオスは、食卓からはなれていないとひどい目にあうぞと脅し、他の者たちは、自分の物でないものを惜しげもなくあたえているのだ(一七、四四六―四五

（二）と返答しているが、これも一応予期されうることである。この返答にたいして、オデュッセウスが、他人の物でも人にあたえないのだから、自分の物であればなにひとつ施してくれないだろう（一七、四五四―四五七）とアンティノオスを皮肉ったのも考えられる返答だろう。こう言われるとアンティノオスが、足台をオデュッセウスに投げたが、これもアンティノオスにふさわしいことであろう。またオデュッセウスがよろめかず、黙って彼らにたいする復讐を考えていた（一七、四五八―四六一）のも理解できる。しかしこの一七、四四六―四六一の場面も、一七、三六〇―三六四、三六七―四一〇を前提として見れば、前後関係がより緊密になり、そこからこの箇所のもつ意味がより深くなるのではないかと思われる。というのも四五―四五二は、三七八―三七九、三八二―三八三、三九七―三九九に対応しており、テレマコスに非難されても（三九七―四〇四）、またオデュッセウスに皮肉られ、警告をうけても（四一五―四四四）、アンティノオスには、乞食に物を与える意志がないのに、いかにもオデュッセウスの館の物を自分があくまで守ってやっているのだという鉄面皮な態度をとろうとしているという意味になるのであるから、乞食になっており、アテネに忍耐強く振舞えと言われているオデュッセウスもついに、他人の物は自分の物、自分の物は自分の物（四四六―四五二）というのがアンティノオスの本心で、自分の物は人になにもあたえないだろうと、テレマコスよりもはるかに痛烈にアンティノオスの貪欲な態度を非難したのだから、無法なアンティノオスが怒って足台をなげたのも自然な反応であろう。だがオデュッセウスは岩のようにしっかりしていて、求婚者たちにたいする復讐を考えていたのは、求婚者殺害という原則をもつ彼にとっては当然のことなのである。それ故、以上を要約すると、三六七―四一〇があることにより、さきに述べたようにアンティノオスの無法と嘆願者への不親切が浮き彫りにされ、四一五―四一八におけるオデュッセウスのアンティノオスをほめる言葉が、極めて巧みな皮肉になっており、四一

九―四四四における自分の運命の変転を述べているのが間接的ではあるがアンティノオスにたいする非常に強い警告になつてゐることがわかるだろう。したがつて、メランティオスのエウマイオスと乞食に関する告げ口、エウマイオスやテレマコスとアンティノオスの口論、オデュッセウスのアンティノオスにたいする皮肉と警告およびこの両者の口論を見れば、三六七―四一〇が、前後の場面とより緊密な関連をもった筋の展開をなしていると言つてよいだろう。²⁴

V

このあとオデュッセウスが、嘆願者を不当にとりあつたアンティノオスに神の復讐があるようにと祈ると、アンティノオスは、オデュッセウスに、でていかないと若い他の者たちが彼を館のなかをひきずりまわすぞと脅した。そこで他の求婚者たちは、嘆願者は神であるかも知れないからひどい仕打ちをするのはよくないと言つたが、アンティノオスは、その言葉さえ無視する無法な態度をとつた。テレマコスは、父親に足台が投げられたのを見て、悲しんだが、父との打ち合わせどおり、耐え忍んだ（一七、四六六―四九一）。一方ペネロペイアは、自分の部屋で、乞食が足台をなげられたのを聞き、求婚者たちを、とりわけアンティノオスを憎み、エウマイオスを呼び寄せて、オデュッセウスの消息を聞きたいから乞食を連れてくるようにと言つた。エウマイオスは、乞食の話したことを彼女にたえたところ、ペネロペイアは直接乞食からオデュッセウスの消息を聞きたい故、彼を呼んでくるようにとエウマイオスに命じ、オデュッセウスがいないから館の災厄を防げないのであり、もし彼が帰国すれば、息子と一緒に求婚者たちに復讐してくれるだろうと言つた。このときテレマコスが大きなくしやみをしたので、ペネロペイアは、テレマコ

スガ吉兆をしめすくしやみをしてくれたと言って、エウマイオスにすぐ乞食を呼んでくるようにそがせた。エウマイオスは、乞食のオデュッセウスのところへいき、ペネロペイアの意向をつたえたところ、老人の乞食||オデュッセウスは、彼女の夫に関して知っていることを自分がすべて述べるつもりでいるが、乱暴な求婚者たちが恐ろしいので、晩まで待つてほしいと頼んだ。そこでエウマイオスは、ペネロペイアに乞食の頼みをつたえて、彼女に納得してもらったあと、テレマコスに、求婚者たちから害を加えられないよう注意してほしいと言って、自分の仕事のために小屋へ帰りたいたいと申しでた。これにたいしてテレマコスは、翌朝またきてくれと命じた。一方求婚者たちは歌と踊りに興じていた（一七、四九二―六〇六）。

以上がオデュッセウスとアンティノオスの口論のあとにおこった事件の梗概であるが、この部分に関しても、やはり分析論者たちは、⁽²⁵⁾改作者の手が加わっていると見ている。たとえばメルケルバッハは、一七、四九二以下の部分において、オデュッセウスが、エウマイオスを通じて、ペネロペイアに会うのを晩まで待つてくれと頼んでいるのは、彼は、本来一九歌の足洗いの場面のもと、ペネロペイアに自分の正体をあかすつもりであったからであると見ている。⁽²⁶⁾そして他の部分にも改作者が手を加えて不自然になっている箇所があると言っている。ところで一七、四九二―五一一においてペネロペイアがエウマイオスを自分の居間に呼び寄せているのはおかしいと、メルケルバッハは言っている。そしてその理由を、ペネロペイアは、自分の居間にいて、広間において起こった事件、とくに足台が乞食に投げられたのを知ることにはできない。しかもこの事件を誰も話していない。それなのに彼女は、女中たちに事件を詳しく語っているのは、不自然であるということ、したがって事件を知ることができないはずのペネロペイアが、エウマイオスを呼んで、乞食を連れてくるように言っているのはおかしく、そうすることができずには、ペネロペイア

が居間から広間への通路の戸のそばにいて、求婚者たちを見ていなければならないという点にあると見ている。そしてこの矛盾を解消するには、エウマイオスが、自分からすすんで広間を出てペネロペイアの居間へいき、彼女に事件を語り、乞食のことについても話したので、オデュッセウスの消息を聞きながら、エウマイオスに、乞食を呼んできてほしいと頼んだのだと見るほかはないと言っている。なおエウマイオスが、乞食のことについて語っている部分で、乞食がミノスの一族のクレタ人で、オデュッセウスとは昔からの友達であり、テスプロトス人のところでオデュッセウスが生還するということを聞いたと確言している箇所（一七、五二二―五二七）は、一四歌、一九歌におけるオデュッセウスの作り話と一致させるために、改作者が挿入したと見ている。

だがメルケルバッハの批判は、はたしてあたっているのだろうか。まず彼が指摘しているペネロペイアの言動であるが、彼女は自分の居間について広間の事件を知ることができないはずなのに知っているような言動をして、エウマイオスと呼ばないのに呼んでいると言って非難している。しかし彼が批判するような場所に、ペネロペイアの居間があったのだろうか。いやすでに述べたように彼女の居間におれば、広間で起こった事件はすべて彼女に聞こえるような館の構造になっており、現に居間にいる彼女自身が、広間においてオデュッセウスに足台がなげられるのを聞いており（一七、四九二―四九三）、またテレマコスが広間でくしゃみをすれば、それも彼女に聞こえているのである（一七、五四一―五四二）。だから、ペネロペイアは、自分の居間について、エウマイオスが乞食の老人にオデュッセウスを広間に連れては行って以後の事件すなわちエウマイオス、テレマコスおよびオデュッセウスとアンティノオスの口論や足台投げなどすべてを聞いて知っていたと見てよいだろう。そうすれば四九二―五〇四におけるペネロペイアと女中たちの会話および彼女の行動も不自然でなく、したがって乞食の老人をつれてきたエウマイオスを呼んで、オデ

ユッセウスの消息を尋ねたいから彼を連れてくるように頼み、エウマイオスも、乞食に出会ってからのことおよび乞食の素姓とオデュッセウスが生きて帰国の途中にあるという消息を聞いたと乞食が確言していると例えば、ペネロペイアがますます乞食に会いたくなり、オデュッセウスさえ帰国すれば、館の災厄はなくなり、求婚者たちもすべて殺害されるだろうという彼女の真の願望を表明したのも当然の成り行きであり、メルケルバッハが、改作者の手になると見なした部分を削除して再構成したものよりも、はるかに自然な筋の展開をしめしていると言えるだろう。

ところでメルケルバッハは、ペネロペイアがエウマイオスを呼ぶことができるというのはおかしいと言っている。

これは、さきにふれたとおり館の構造のために、ペネロペイアは、事件を何も知らないはずであり、直接エウマイオスに呼びかけられないのに、彼を呼んでいると描写されているからである⁽²⁸⁾。だが、ペネロペイアは、自分でエウマイオスを呼ぶ必要があるのだろうか。たしかに動詞 *kaleo* の分詞 *kalesāsa* がつかわれ、「呼ぶ」⁽²⁹⁾ という意味になるが、

一、四一五—四一六において、テレマコスが、「母が広間⁽²⁸⁾別広間へ呼んで (*kalesāsa*) 尋ねる占い師の予言をも信用しない」と言っている場合には、母ペネロペイアが直接占い師に声をかけて、広間へ呼びいれている状況を想像するのはむつかしく、女中をつかって占い師を呼び寄せたと見るほうが自然だろう。また一七歌でペネロペイアは、エウマイオスに乞食の老人をここへ呼んでこい (*kalesson*)⁽³⁰⁾ と言っている (一七、五二九—五四四) が、*kalesson* もおなじ *kaleo* の命令法であり、この場合には、エウマイオスが直接乞食にペネロペイアの意向をつたえて呼んでくるといふふうに見ざるをえない。だがこのようにペネロペイアは、館の構造上、広間⁽³⁰⁾主広間の事件を聞くことができても、広間にいる者に、かなりの声をださないと直接話しかけることはできないし、また彼女も自分で求婚者たちにいる広間へでいく心境にはなっていなかった (一八、一六四—一六五、一八二—一八四)。それ故、彼女が広間

へいき、直接見知らぬ乞食に会い、内々に自分のところへくるようにとは言えなかったから、エウマイオスを使ったと見うるのである。したがってエウマイオスをペネロペイアが呼んだのも、彼女が求婚者たちのいる広間へいったり、王妃である彼女が大きな声で騒がしい広間にいるエウマイオスに呼びかけたりしうる状況でなかった故に、彼女は女中を使ってエウマイオスを呼び寄せたと、一歌のように、想像するほうが自然であると思われる。現にエウマイオスは、ペネロペイアの使いとしてオデュッセウスのところへいき、「ペネロペイアがあなたを呼んでいられる(Kalei) (一七、五五三)」と言っているのである。なおメルケルバッハ自身も、ペネロペイアは広間へはいけないといい、広間の戸のそばに立っているのもおかしいと言っているのである。

ところでペネロペイアの意向すなわちオデュッセウスの消息を尋ねたいということ、エウマイオスが、オデュッセウスにつたえたところ、オデュッセウスは、晩まで待ってくれるようにと頼んでいるのは、さきに紹介したとおりであり、またメルケルバッハが、このオデュッセウスの要請を一九歌において本来なされていたと見なされる再会の場面に対応して作られたものと見ているのもすでに言及したところである。しかしオデュッセウスの要請を、メルケルバッハのような見解から、必要なものと見なさねばならないだろうか。エウマイオスに、ペネロペイアのところへいくようにと言われたオデュッセウスが、晩まで待ってくれるようにという理由として、乱暴な求婚者たちの恐ろしさと、彼らの乱暴を自分のためにふせいでくれるものがないということ(一七、五六四―五六八)、さらに晩になって自分がぼろを着ていて寒いので火の側に自分を坐らせるということ(一七、五七二―五七三)、いかえれば彼女と自分が身近に坐り、火にあたたまりながら邪魔されずにゆっくりと二人で話したいということあげているのである。⁽³²⁾そしてエウマイオスもペネロペイアも、この意見をもっともなものとして了承し、晩に会うことになった。

しかもその際に、老人のオデュッセウスは、ペネロペイアの要請（一七、五五四―五五五）に応じて彼女の夫オデュッセウスの帰国の日について話すのは（一七、五七一）、明白である。そして彼は、エウマイオスの場合とおなじように彼女の夫の帰国を信じさせようと全力をあげて努力するとともに、長年夫の消息を知ることができなかった妻の心境を知ろうと心掛けるだろう。だがそれ以上のこと、つまりメルケルバッハが推定しているような正体をあかすというようなことを、オデュッセウスは考慮していないと思われる。というのは、この段階では、オデュッセウスとテレマコスにとっては、求婚者たちをすべて殺害すること、誰にもオデュッセウスが帰国していることを知らしてはならないということが原則である以上、アテネがこの原則を変更しない限り、オデュッセウスは、ペネロペイアの要請に応じる努力をするだけであると見て差しつかえないだろう。

VI

エウマイオスが田舎の小屋に帰り、夕方が近づき、求婚者たちが歌と踊りで楽しんでいるとき、乞食のイロスがやってきた。イロスは乞食のオデュッセウスを館から追いだそうとしたので、両者の間に口論が起こり、それがついに喧嘩になった。求婚者たちはこれを見て喜び、とくにアンティノオスは、勝った者に山羊の脂身をあたえ、自分たちと席を一緒にさせてやると言った。このときオデュッセウスは、求婚者たちがイロスの味方をしないように誓ってほしいと言ったので、彼らは誓言した。がテレマコスは、さらに、オデュッセウスに手だしをする者がおれば、多くの者を相手にすることになる。というのも自分が主人で、思慮深いアンティノオスとエウリュマコスが自分の味方だと

言うと、彼らはみな賛成した。そこでオデュッセウスがぼろを腰のまわりにたくしあげると、アテネは彼の四肢を大きくした。これを見て皆は驚いたが、とくにイロスは勇気をなくし、こわがってふるえた。しかし召使たちは無理に彼を連れていった。これを見てアンティノオスは、イロスに、オデュッセウスに負けると、人間をばらばらにして犬に食わせる残忍な王エケトスのところへ送ってやると言った。するとイロスはますますふるえた。そこでオデュッセウスは、正体を見破られないように、首を打ち、その骨を折ったので、イロスは気を失い、地面に倒れた。求婚者たちは、これを見て笑った。オデュッセウスは、イロスを引きずりだし庭の壁にもたれさせた。オデュッセウスがもどつてくると、求婚者たちは彼に祝いの言葉を述べ、アンティノオスは約束の物を彼にあたえ、アムピノモスもパンをあたえ、杯をわたし、オデュッセウスの幸福を祈って乾杯しようとした。しかしオデュッセウスは、アムピノモスに、人間の運命ほどはかないものはない。自分も昔は幸福であったが、乱暴狼籍を働いたので、このような目にあっている。人間は無法であってはならないのだ。だが求婚者たちは無法な行動をしている。もし館の主婦の夫が帰国すれば、流血の争いが起こるだろうと言って、杯の酒を飲み、杯をアムピノモスに返した。するとアムピノモスは、不吉な予感をうけ、心を痛めながら広間を通っていった。だがアテネは彼も破滅させたのである（一八、一一一五七）。

以上がイロスの場面とそれにつづくオデュッセウスとアムピノモスの対話である。ところでシャードヴァルト⁽³⁴⁾は、オデュッセウスが、求婚者たちにイロスの味方をしないことを誓わせ、テレマコスもその確認をとっている箇所（六一六五）、およびアンティノオスが、イロスに負ければエケトスのところへ送ってやると叱っている箇所（七八一八八）を改作者の手になっていると見ている。またベッスリヒ⁽³⁵⁾は、オデュッセウスが、アムピノモスに語り、アムピノモスが無言で去っていく場面（一八、一一九一一五七）について問題提起をしている。まずシャードヴァルトが改

作者の手になっていると見なす箇所であるが、一見すると彼の言うように、この箇所がなくとも筋の展開に支障はきたさないうのである。しかしオデュッセウスは、イロスとの争いにおいて絶対に負けられないのである。彼は一三歌におけるアテネの指示にもとづき、求婚者たちすべてを館で殺害せねばならないからである。このことはテレマコスも知っているところである。しかもオデュッセウスは自分の正体を隠しておかねばならない。もちろんテレマコスはこれも承知している。つまりこの二点は、すでに指摘したように、父子にとっての行動の原則にはいっているのである。それ故、オデュッセウスが、容易にしかも確実に、イロスに勝てるよう考えるのは必要なことであり、それには、彼がイロスとだけ闘えるように配慮することが、この場合もつとも肝要な戦術と言えらるう。また父から言われてこの原則を心得ているテレマコスが、その戦術を支持する発言をしているのも、当然であらう。そしてこの賢明なオデュッセウスの「策略に富んだ（一八、五一）」発言に応じて、アテネがオデュッセウスに助力しているのも不自然ではない。³⁸このように見てくると一八、五〇―六五におけるオデュッセウスとテレマコスの発言は、その前後の場面と緊密な関連をもっており、この発言がない場合よりも、より深い意味をもった筋の展開をなしていると言えるだろう。ところでシャーデヴァルトが改作者の手になると見ているアンティノオスのイロスにたいする叱責であるが、この叱責によって、アンティノオスが、あらたにきた乞食の老人³⁹オデュッセウスのみならず、すでに乞食をしているイロスにたいしても無情な仕打ちをすることがわかるだろう。そしてオデュッセウスの場合には、アンティノオスが、求婚者たちがオデュッセウスを館じゅう引きずりまわすぞ（一七、四七九―四八〇）と言ったのにたいして、他の求婚者たちが反対しているのに、イロスの場合には、アンティノオスの叱責に彼らも賛成し、負けた彼をエケトスのところへ送ってやる（一八、一一五―一一六）と言っているのは、イロスが、おなじ乞食のオ

デュッセウスに悪意をいただき、彼を排除しようとしたことに、イロスがうけた災厄の原因があると見ているからだろう。なおこの叱責にもなう事件によってアテネが言った求婚者たちのうちの「無法者と寛容な者を見わけるように（一七、三六二―三六三）」との指示をオデュッセウスは、実行することができ、また実行していると言えるだろう。現にベッスリヒが取りあつかっているオデュッセウスとアムピノモスの場面では、アンティノオスが、約束した食物をオデュッセウスにあたえたあと、さらにアムピノモスは、パンをオデュッセウスにあたえ、杯をわたし、オデュッセウスの幸運を祈って乾杯しようとしているのである。彼は、まったく善い求婚者と言えるだろう。それ故またオデュッセウスも、さきに述べたような内容のこと（一八、一二五―一五〇）をアムピノモスに言ったのである。ところでベッスリヒは、オデュッセウスが語っている間アムピノモスが沈黙をまもっているのは不自然なようだが、その沈黙はオデュッセウスの話を聞いて不吉な予感をいだいたことをしめしていると見ている。だがオデュッセウスの言葉の内容は、求婚者たちの乱暴狼籍とオデュッセウスと求婚者たちの流血の争いを除いては、短いがほぼオデュッセウスがアンティノオスに言ったこと（一七、四一五―四四四）とおなじである。しかし前後関係から見て、アンティノオスへの言葉には、皮肉と間接的な警告がこめられているのにたいして、アムピノモスへの言葉には親身の警告がこめられているのである。いや「神があなたを家へ連れ去ってくれるように（一八、四一六―四一七）」とオデュッセウスが言っているのを見れば、アムピノモスが求婚者たちとわかれて助かってほしいという願望さえ表明されていると思われるのである。そしてこのような親身の警告をうければ、根が善良であるアムピノモスは、オデュッセウスに返す言葉もなく、心を痛め、自分の行動を反省した結果不吉な予感をいだいたと見うるのではなからうか。

このあとアテネは、ペネロペイアにその姿を求婚者たちの前にあらわさせ、彼らの心をそらさせると同時に、夫

や息子から尊敬されるようにさせようとした。それ故彼女は二人の侍女にしたがわれて広間におりた。求婚者たちは、恋に心を奪われ、彼女と寝たいと願った。だが彼女は、テレマコスに、広間における事件についての彼の態度を叱責し、乞食の老人 \parallel オデュッセウスが死ねば、世間の非難をうけると注意した。これにたいしてテレマコスは、求婚者たちが無法であるうえに、自分には味方がないので、どうすることもできなかったが、イロスが負けて、庭で坐っており、求婚者たちもイロスのようになればよいと言った。このときエウリュマコスが、アルゴスのすべてのギリシア人がペネロペイアを見れば、もっと多くの求婚者が館で宴を催すだろうと言った（一八、一五八―二四九）。するとペネロペイアは、自分の夫がトロイアへ出征するときに言った言葉を述べ、自分は再婚することになるだろうが、求婚者たちは、慣例にしたがって贈物をするべきだと言った。オデュッセウスは、これを聞いて、ペネロペイアがより多くの贈物を得ようとしている意図を察して喜んだ。一方アンティノオスは、贈物をしようと提案し、他の者も賛成し、贈物を取り寄せた。そこでペネロペイアは、自分の居間にもどり、女中たちが贈物を運んだ（一八、二五〇―三〇三）。

以上がペネロペイア出現の場面であるが、やはり分析論者たちは⁽³⁸⁾この場面が改作者による挿入と見なしている。たしかに分析論者ならずとも、乞食の老人 \parallel オデュッセウスと晩に会う手筈ができていのに、この段階でどうしてペネロペイアが現われる必要があるのかという疑問が生じる。しかしアテネは、意味もなくペネロペイアを求婚者たちのところへいかせたのではないだろう。このアテネの意図を知る手掛りは、やはり本文にもとめざるをえない。アテネは、彼女に「求婚者たちの心をそそり、前にもまして夫と息子から尊敬されるように（一八、一六〇―一六二）」、求婚者たちの前にその姿を現わさせようとしたのである。そこでなぜ一八、一六〇―一六二をアテネがペネロ

ペイアに思わせたのかということが問題になる。それには、まずこの前の部分との関連を見てみる必要がある。エウマイオスとアンティノオス、テレマコスとアンティノオス、乞食の老人||オデュッセウスとアンティノオスの三度にわたる口論およびアンティノオスの足台投げ(二七、三七四―四八〇)をペネロペイアも知っており、彼女もアンティノオスを非難しているが、これはアテネのオデュッセウスへの指示(一七、三六二―三六三)が原因なのである。だがそのあとイロスとオデュッセウスの争い、アムピノモスとオデュッセウスの対話がなされている。このことももちろんペネロペイアは知っていると見てよい。そしてアムピノモスのように、オデュッセウスによって自分の行動を反省させられるものがでてくれば、乞食のオデュッセウスが館で数多くの苦痛をうけても耐え忍び、彼の帰国を知らせない(一六、二七二―二七七、三〇〇―三〇三)という原則にもとづく行動を、オデュッセウスもテレマコスもとれなくなってくるだろう。そこでアテネが介入し、ペネロペイアに一八、一六〇―一六二のことを思わせ、求婚者たちの前に彼女の姿を現わさせようとしたのである。ではこの一六〇―一六二のことがどうして、オデュッセウスとテレマコスに苦痛を耐えしのばせることになるのだろうか。もちろんこの場合、ペネロペイアは、乞食の老人がオデュッセウスであることを知ってははいない。そこで彼女が求婚者たちの前に姿を現わすと、一歌のように求婚者たちがすべて彼女と寝たいと願う(一、三六六)のは、想像しうるところであろう。この様子を見れば、オデュッセウスもテレマコスも求婚者たちに怒りの気持をいだくだろうが、それをおさえねばならない。さらにペネロペイアは、広間へいくには、ただ自分の姿を求婚者に見せるだけではなく、客人を親切にあつかわねばならないと、館の者とりわけ自分の身内である息子のテレマコスに注意するのを目的とするだろうと思われる。また彼女がこのような行為にでることにより、夫の消息がわからず、ただ悲嘆にくれ、ギリシア軍の帰国を歌うペミオスに歌をやめてくれと広間におりてき

た（一、三二五―三四四）彼女とは異なっており、求婚者たちに荒らされようとも、館の主婦として言うべきことは言い、為すべきことは為す賢明な女性であることをしめすことになり、そうすることによってテレマコスと乞食のオデュッセウスに尊敬の念をいだかせることになるだろう。しかし彼女の客人に親切にするようにという注意は、求婚者たちを怒らせ、ペネロペイアに圧力をかけると同時に客人を苦しめようとするだろう。以上一八、一五八―一六二におけるアテネの介入の意図を理解しようとして筋の展開をも推定してきた。だが、このように前以て筋の展開を推定して本文を検討するのは、この推定にあわせた解釈をすることになりがちであるが、いまは一応この推定はあくまで推定として、本文に則して、ペネロペイアの行動と他の人物の反応を見ていきたい。

VII

さてアテネの介入の意図は、さきに述べたとおりであるが、この介入によってペネロペイアは自分の姿を求婚者たちに見せようと思ひ、「無理に笑って（一八、一六三）³⁹」エウリュノメを呼び、以前にはこんな気持にはならなかったのに、憎い求婚たちの前に出ようと思っている（一六、一六四―一六五）といい、その際テレマコスに口ではよいことを言いながら、心では悪事をたくらんでいる傲慢な求婚者たちと一緒にならないように忠告してやる（一六、一六六―一六八）と言っている。ここでベッサリヒは、ペネロペイアは、アテネの意図を知らないため、自分が求婚者たちの前にあらわれる理由がわからず、テレマコスに忠告するという理由を無理につくっており、そのことを彼女の困惑した笑いがしめしていると見ている。しかしペネロペイアの無理な笑い、あるいは困惑した笑いは、彼女の息子

に忠告するという理由づけと対応したものだろうか。それよりも、彼女自身が一八、一六四―一六五で言っているように、これまででいく気持がなかったのに、求婚者たちの前にでる気持になった。この気持をエウリュノメネに打ちあけ、はずかしさをかくすため、やむをえず笑ったと見るほうが自然であろう。そして求婚者たちの前にでる以上は、求婚者たちが彼女と一緒に寝たいと願っているときに（一八、二一一―二一二）でも館をあづかる主婦として、毅然たる態度で息子に彼らとまじわってはならないように忠告する、つまり悪い意図をもつ彼らと一緒に客人に接してはいけないと注意するのは、当然のことであると思われる。だがテレマコスにとっては、求婚者たちと交わることはオデュッセウスの指示なのである。しかしこのような彼女の行為は、夫や息子から尊敬の念を得ると同時に求婚者を怒らせ、オデュッセウスとテレマコスが苦痛を耐え忍ぶという原則にもとづく行動をとる前提になるのである。このように見れば、アテネの介入がさきの原則にもとづいたものである以上、ペネロペイアのテレマコスへの忠告は、彼女が求婚者の前にでるための無理な理由ではなく、アテネの介入に則した当然の理由であると言える。現にペネロペイアの気持を聞いたエウリュノメは、彼女の言葉に同意し、ペネロペイアの言ったことはすべて正当であり（一八、一七〇）、「おいでになり、息子様にかくさずお話しなさいませ（一八、一七一）」と求婚者たちの前にでることをすすめているのである。しかもエウリュノメは、ペネロペイアに、テレマコスも大人になっているのだから、身綺麗にするようにと助言している（一八、一七二―一七六）。

しかしペネロペイアは、自分は夫と別れてから美しくなくなったのだと言って、身綺麗にすることをことわり、男のなかへひとりで行くのは恥ずかしいから、二人の侍女がついてきてくれるようにしてほしいと言った（一八、一七九―一八四）。そこでアテネは、自分の意図（一八、一五八―一六一）を実現するために、ペネロペイアを眠らせ、

彼女の姿を美しくした。眠りからさめたペネロペイアは、夫のために悲しまずにすむように、深い眠りのような安楽な死を願いながら、二人の侍女をしたがへて求婚者たちのところへいった（一八、一八七―二二一）。するとすべての求婚者たちの膝はふるえ、欲情にかられて、彼女と一緒に寝たいと願ひ、そのことを祈ったのである（一八、二二―二二三）。こうしてアテネの意図の一つは、実現した。

しかしペネロペイアは、このような求婚者たちにはむかわず、エウリュノメに言ったとおり、テレマコスにむかって注意した。だがその注意の内容は、求婚者たちとまじわってはいけないうことではなく、さきにすこしふれたように、テレマコスは、もう正しい考えをもっていない。この館で起こった事件は何事だ。客人がひどい仕打ちをうけているのを黙って見のがしているのは。客人が死ねば、テレマコスは、世間から非難されるのだ（一八、二〇―二二五）と、客人を助けなかったテレマコスを非難しているのである。ところが一八、二二〇―二二五を見れば、この場合客人がひどい仕打ちをうけるままにしておくということは、テレマコスが、乞食のオデュッセウスがイロスと闘うことになったとき、その闘いをさせて、オデュッセウスを助けず、闘いを面白がっている求婚者たちと一緒にあって見ていたことを意味しており、このことは求婚者たちとおなじ態度をとっていることになり、求婚者たちとまじわっていると思われるも仕方がないのである。したがってテレマコスの客人にたいする態度を非難することは、彼に求婚者たちとまじわってはいけないうことと注意することであり、しかもこのことは、間接的に求婚者たちへの攻撃になっているのである。まさにエウリュノメからかくさず息子に話すようにと言われたとおり、彼女はテレマコスに言ったのである。それ故このようにペネロペイアが、求婚者たちの欲情的になりながら、毅然とした態度で、客人を保護するようにテレマコスに注意して、求婚者たちの態度を攻撃することが、オデュッセウスやテレマコ

スに尊敬の念をいだけかせはじめたのであると見てよいだろう。現に、ペネロペイアから注意されて、これまでよりもさらに大胆に、テレマコスが、自分はすべてに關して賢明な考えをもつことはできない。というのも悪い企らみをお願いしている求婚者たちが自分を取り囲んで、困惑させており、自分には味方がいない。だが客人はイロスを負かし、求婚者たちの思惑どおりにならなかった。イロスは庭の戸口に坐っているが、求婚者たちもあのようになればよい（一八、二三〇―二四二）と、あからさまに求婚者たちの行動を非難し、彼らの破滅を願ったのである。母親に注意されたテレマコスの反応、すなわち客をまもうとする母親への敬意は、求婚者たちへの直接的な攻撃として表現されたのである。

ではこのような母親と息子の対話を聞いていた求婚者たちは、どのような態度をとったのであろうか。彼らのうちのもう一人の実力者エウリュマコスは、ペネロペイアの美しさをたたえ、アルゴスのギリシア人が彼女を見れば、求婚者をもっと多くなり、館で宴を開くだろう（一八、二四五―二四九）と言った。この言葉は、一見これまでのペネロペイアとテレマコスの対話を聞いておらず、ペネロペイアの美しさをほめているだけで、おかしい表現のように思われる。だがその内容をよく見ると、もっと多くの求婚者が館で宴会するだろうというのは、求婚をやめて館を去るというようなことはけっしてしないことを表明しているのである。したがって求婚者たちは、二人の対話を聞いており、求婚者たちにたいする二人の間接的、直接的攻撃にたいして、エウリュマコスは、館を去らないという表明で、怒りを含んだ間接的な反撃をしていると言えよう。この反撃にたいして、ペネロペイアは、さきに紹介したように、オデュッセウスが出征する時に言いのこした、自分がいない間は、館にとどまって、父母の世話をし、息子が成人すれば館をでて、気に入った人と再婚するようにという言葉を述べ、夫の言いのこしたことは成就される。そうすれ

ば自分の嫌な再婚をすることになる。ところでこの館にいる求婚者たちは慣例に反して他人のものを食べている。求婚する者は、自分のほうから立派な贈物をするべきだ（一八、二五一―二八〇）と言った。このペネロペイアの言葉を要約すると、夫の言いのことしたことは成就され、彼女は嫌だが再婚することになるだろう。しかし求婚者たちは慣例にしたがって贈物をすべきであるということになる。したがって彼女は、夫を愛し忘れられないでいるが、現状においては、やむをえず再婚するのだということを一応述べておき、さらに息子のことにも配慮して、贈物により、求婚者たちのために失ったものをとりもどしておこうと考えているわけである。

以上のようなペネロペイアの言葉を聞いたオデュッセウスは、すでにアテネからペネロペイアの本心を聞いている（一三、三七七―三八一）故、彼女が求婚者たちをなだめながら、彼らに贈物を貢がせ、内心では自分の帰国をできるだけ長く待つつもりであることを自分の耳で確かめて喜んだ（一八、二八一―二八三）のも当然だろう。ところでペネロペイアに贈物の要求をされた求婚者たちが、彼女が自分らのうちの一人と結婚するまでは館を去らないが、贈物はしようというアンティノオスの提案に賛成し、それぞれ多くの贈物を持ってこさせた（一八、二八四―三〇一）のも自然の成り行きである。

だがこのように見てくると、アテネの介入により、ペネロペイアは、求婚者たちの欲情をそそりながら、テレマコスへの注意によって父子の尊敬を得るとともに、彼女への返答を通じたテレマコスの求婚者たちへの攻撃によって彼らを怒らせてはいるが、エウリュモコスへの返答によってオデュッセウスを喜ばせながら、求婚者たちに贈物をさせて彼らの怒りをおさえてしまっているようである。それ故、館でオデュッセウスが苦痛をうけても耐え忍び、彼の正体を隠しておくという父子の行動の原則は、実行されないまままで終るのではないかと思われそうである。しかしこの

あとの場面を見るとそうでないことがわかるだろう。

ペネロペイアが自分の居間にもどったあと、求婚者たちが歌と踊りを楽しんでいる間に夕方になり、女中たちが明りをつけた。だが女中たちが、ペネロペイアの側にいるべきであるのに、男たちの広間にいることが、オデュッセウスには、気にいらなかった。それ故、彼は、女中たちにペネロペイアの部屋へいけといい、自分が、必要とあれば、朝まででも求婚者たちに明りの世話をすると言った。すると女中たちは、顔を見合せて笑い、エウリュマコスと通じている女中のメラントが、オデュッセウスに、生意気なことを言っていてイロスより強い人に頭をなぐられ血だらけになってほりだされないように用心しろと彼をののしった。そこでオデュッセウスは、メラントに、彼女のことをテレマコスに告げると言っただけで、女中たちを追っ払い、明りの世話をしながら彼女らにたいする復讐のことを考えた（一八、三〇七―三四五）。女中たちが、自分の仕える主人ペネロペイアよりも、憎むべき求婚者たちのために明りの世話をしているのは、館の荒廢を如実にしめしており、彼女の夫であるオデュッセウスにとっては耐えられないことであろう。したがって、自分が明りの世話をするから、主人の側で女性としてのまともな仕事をするようにと、乞食の立場をわきまえ、忍耐して彼女らに忠告したのも当然だろう。しかし彼女らは、オデュッセウスを嘲笑し、とりわけペネロペイアに可愛がられたメラントが、オデュッセウスをののしったので、彼もついに彼女を辱したのもやむをえないことと言える。

だがアテネはさきの原則にしたがい、さらにオデュッセウスに苦痛をあたえるために、求婚者にオデュッセウスを嘲笑させた。とくにエウリュマコスは、乞食の老人||オデュッセウスの禿頭をからかいながら、自分が十分な給料で彼を雇うても、野良仕事をする気がないだろう。というのも彼は乞食をして廻って食欲を満たそうと思っており、働

く意志がないからだといって侮辱した（一八、三四六―三六四）。そこでこの嘲笑と侮辱に怒ったオデュッセウスが、エウリュマコスと野良仕事で競っても、戦闘で競っても負けはしない。エウリュマコスはつまらぬ者としかまじわっていないからうぬぼれているのだ。だがオデュッセウスが帰ってきたら、逃げだすのにあの広い戸も狭すぎると思えるだろうとこれまでよりも激しい言葉でエウリュマコスにいい返したのは当然の反発と言える。またこのオデュッセウスの言葉に、遠慮せずに生意気なことを言うのはイロスを負かしたからなのかと言って、乱暴にも足台を投げたのは、傲慢なエウリュマコスにふさわしい反応である。乞食の老人!!オデュッセウスは、エウリュマコスのこの乱暴な行為を恐れて、アムピノモスの膝にすがったので、足台は酒を注ぐ者の右手にあたって、酒差しが床に落ち、注ぎ手自身は床に倒れた。求婚者たちが、乞食はどこかでくたばっておればよかったのだ。この乞食のために争って、御馳走もだいなしだと言ったので、テレマコスは、求婚者たちに、もう十分に飲み食いしたのだから、気がむけば帰って眠るがよい。だが自分は何れも追いたてはしないと云った。このテレマコスの大胆な言葉を聞いて、求婚者たちは驚いたが、アムピノモスが、正しい発言に怒る理由はない。客人や召使いに乱暴するのはよくないことだ。もう神々に酒をささげて家に帰って眠ろう。そして客人をテレマコスの世話にまかせようと言ったので、彼らはアムピノモスに賛成して帰っていった（一八、三六四―四二八）。

こうして広間には、オデュッセウスとテレマコスだけが残る機会ができたのである。そこですでにさきに取りあつかった武器隠しをなしとげ、テレマコスは自分の部屋にもどり、オデュッセウスだけが、アテネと求婚者殺害の方法を考えながらペネロペイアと会うために広間に残ったのである（一九、一―五二）。

以上のように見てくると、アテネ、オデュッセウス、テレマコスが、求婚者たちを殺害すること、館で苦痛を耐えて

オデュッセウスの正体をあかさないと原則にしたがって行動しており、筋もこの行動に応じた矛盾のない自然な展開をしていることが理解できるだろう。したがって分析論者たちが矛盾と見なしている箇所も矛盾ではなく、また統一論者とくにベッスリヒやアイゼンベルガーが統一論的に解釈している箇所でも、⁽⁴⁰⁾アテネの指示を基本にして、両学者とは違った方法で統一論的に解釈できると言えるだろう。事実メランティオス、アンティノオス、メラント、エウリュマコスとオデュッセウスの口論やその間におけるアテネの介入などは、さきの原則をふまえて理解しないと、不自然なものに思えるだろう。しかも故郷においてオデュッセウス一家に悪意をもつ人物たちを知ること、オデュッセウスにとっては、やはり一種の再認と言えるのではないか。

注

- (1) Schadewaldt, Von Homers Welt und Werk, Stuttgart, 1959, 391ff.
- (2) Schadewaldt, Die Odyssee, Übersetzt in deutsche Prosa, Hamburg, 1958, 330.
- (3) Schadewaldt, Welt und Werk 375f. *αὐτὸν ἠναρὶ βέλτερον* は、改作者の才能を、他の分析論者のように低く評価して見なしている。
- (4) Eisenberger, 223.
- (5) Schadewaldt, Übersetzt 330 ; Schadewaldt, Welt und Werk 393.
- (6) Cf. Müller, 110 ; Eisenberger, 225.
- (7) Cf. Eisenberger, 226.
- (8) Müller, 112.
- (9) Cf. Schwartz, Die Odyssee, München, 1924, 326 ; Wilamowitz, Heimkehr 114f. ; Schadewaldt, Übersetzt 330 ; Eisenberger, 229f.

- (10) Wilamowitz, Heimkehr 144. なお統一論者でも Eisenberger, 227, Anm. 16 でも一六、二八六―二九四を挿入と見なしている。
- (11) Cf. Ameis, Anm., 16, 297, 298. この箇所は Voß, Homer, Odyssee, Reclam, 1969; Weiher Homer, Odyssee, Griechisch und deutsch, Gernsbach, 1955 の訳を採用した。
- (12) Cf. Eisenberger, 228f.; Erbse, 33ff.; Woodhouse, The Composition of Homer's Odyssee, Oxford, 1969, 158ff.
- (13) Cf. Beßlich, 23ff., 115ff.; Eisenberger, 232.
- (14) 一一、二八七―二九七、三二六―三二七、一五、二二二―二五七、五二五―五三四 参照。
- (15) Cf. Eisenberger, 233.
- (16) Kirchoff, 515; Merkelbach 78; Schadewaldt, Übersetzt, 330.
- (17) Focke, 304.
- (18) H. Eichhorn, Homers Odyssee, Göttingen, 1965, 152f.
- (19) R.J. Cunliffe, A Lexicon of the Homeric Dialects, Glasgow and Bombay, 1963, 2 fts, (6) の意味による。
- (20) 一六、二五四―二五五との関連において敵たちを、すべての求婚者たちと解することができる。
- (21) 拙著「求婚者にたいする神々の怒り」同志社外国文学一九・二〇合併号参照。
- (22) Müller, 115; Eisenberger, 234.
- (23) 求婚者たちのうちで、オデュッセウスの物乞いに親切に応じ、食べ物にあたえる者たちがおっても、彼らもペネロペイアに不当な求婚をし、オデュッセウスの物を食べたり、オデュッセウスにあたえたりしているのであり、しかも求婚はやめないものであるから、やはり彼らは罪をおかしており、殺されて当然と見るべきであろう。
- (24) Cf. Wilamowitz, Heimkehr, 155; Merkelbach, 79; Beßlich, 136ff.; Eisenberger, 234ff.
- (25) Kirchoff, 515; Von der Mühl, 744f.; Schadewaldt, Übersetzt, 330; Merkelbach, 82ff.
- (26) Merkelbach, 1ff.
- (27) 拙著「テレマコスの奮起」人文学、一〇一号参照。
- (28) Cf. Eisenberger, 239.

- (29) 「テレマコスの奮起」参照。
- (30) 「テレマコスの奮起」参照。
- (31) *kaleo* の三人称単数直接法現在。*kaleo* は、ある人を使ってある人を呼び寄せるという意味にとつてよい。*Menge, kaleo*, 2.
- (32) Cf. *Ameis, Anm. 572. 一七、五八三—五八四* 参照。
- (33) テレマコスが、オデュッセウスの消息をもとめに旅立つ行為に、父子の精神的な接近を認めることができたのと同様に、ペネロペイアが、乞食の老人にオデュッセウスの消息を尋ねようとし、乞食もそれに応じようとすることに、夫妻の精神的接近がなされつつあることがわかるだろう。Cf. *Eisenberger, 240.*
- (34) *Schadewaldt, Übersetzt, 330.*
- (35) *Beßlich, 77ff.*
- (36) *Schadewaldt は* このアテネが助力している箇所を改作者の手になっているとは見ていない。*Schadewaldt, Übersetzt, 330.*
- (37) Cf. *Beßlich, 77ff.*
- (38) *Wilamowitz, Homerische Untersuchungen, 28ff. ; Wilamowitz, Übersetzt 19ff. ; Bethe, 92 ; Focke, 309ff. ; Merkelbach, 10ff. ; D. Page, Homeric Odyssey, Oxford, 1955, 124ff. ; G.S. Kirk, The Songs of Homer, 1962, 145f.*
- (39) *Ameis, 18, Anm. 163.*
- (40) *Beßlich, 77ff. ; Eisenberger, 231ff.*